

# 街路樹剪定マニュアル

埼玉県県土整備部道路環境課

令和2年12月



## 目次

1.	本書の構成	1-1
2.	街路樹の機能・剪定の目的	2-1
2.1	街路樹の機能	2-1
2.2	剪定の目的	2-2
2.2.1	道路の機能・空間との調和	2-2
2.2.2	樹勢の維持	2-2
2.2.3	景観の創出・維持	2-2
3.	管理目標樹形の設定	3-1
3.1	現状把握の方法	3-3
3.2	管理目標樹形の設定	3-5
3.2.1	管理目標樹形の検討	3-5
3.2.2	生育空間から最大の大きさを算出	3-12
4.	剪定方針・剪定方法の設定	4-1
4.1	剪定方針、剪定方法の設定	4-1
4.1.1	剪定方針（目標タイプ）の設定	4-1
4.1.2	剪定時の樹形の設定	4-2
4.1.3	剪定方法の設定	4-3
4.2	目標タイプ別の剪定	4-3
4.2.1	自然樹形で仕立てるタイプの剪定	4-4
4.2.2	人工樹形で仕立てるタイプの剪定	4-10
5.	剪定の基本技術	5-1
5.1	美しい街路樹を実現するための留意点	5-2
5.2	樹木の生育サイクルと剪定時期	5-3
5.2.1	剪定の時期と要点	5-3
5.2.2	厳禁とする剪定	5-4
5.2.3	花木の剪定	5-5
5.3	剪定の原則	5-6
5.3.1	樹体を構成する用語と解説	5-6
5.3.2	剪定の手法	5-7
5.3.3	枝葉のバランスを保つ剪定	5-13
5.3.4	樹幹と樹冠	5-14
5.3.5	樹形の縮小	5-15
5.3.6	不整形樹の修正	5-17
5.3.7	コブのついた樹木の剪定	5-21
5.3.8	常緑街路樹の剪定	5-23
6.	強い切詰剪定（強剪定）による樹形の作り直し	6-1
6.1	強剪定とは	6-1
6.2	強剪定の考え方	6-2
6.3	強剪定を行う場合の留意点	6-3

6.4	強剪定を行う場合の周知方法.....	6-4
6.4.1	周知の対象者.....	6-4
6.4.2	周知方法の例.....	6-4
6.4.3	周知内容の例.....	6-4
7.	主要街路樹の管理・剪定方法等.....	7-1
7.1	主要街路樹一覧.....	7-2
7.2	主要街路樹の詳細.....	7-4
8.	用語集.....	8-1
9.	巻末資料.....	9-1
9.1	現状把握シート（案）.....	9-1
9.2	ケーススタディ（ケヤキ）.....	9-2
9.3	樹形再生の実施例.....	9-3

# 1. 本書の構成



## 1. 本書の構成

本書では、街路樹を健全に維持し、かつその機能を活かすことが出来るよう、剪定の考え方や方法を示している。

本書の構成と街路樹剪定の基本的な手順を図 1-1に示す。

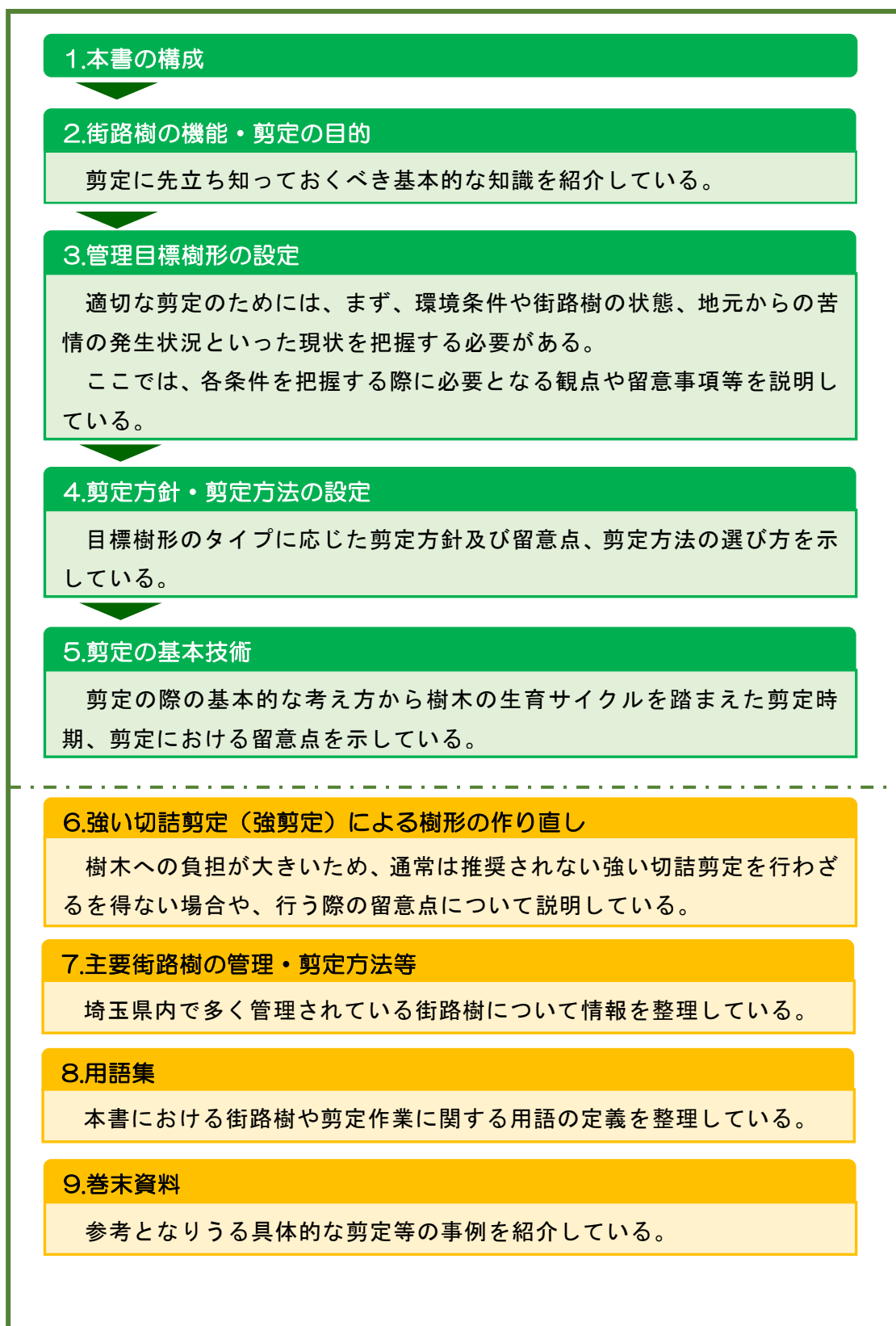


図 1-1 本書の構成と街路樹剪定の基本的な手順





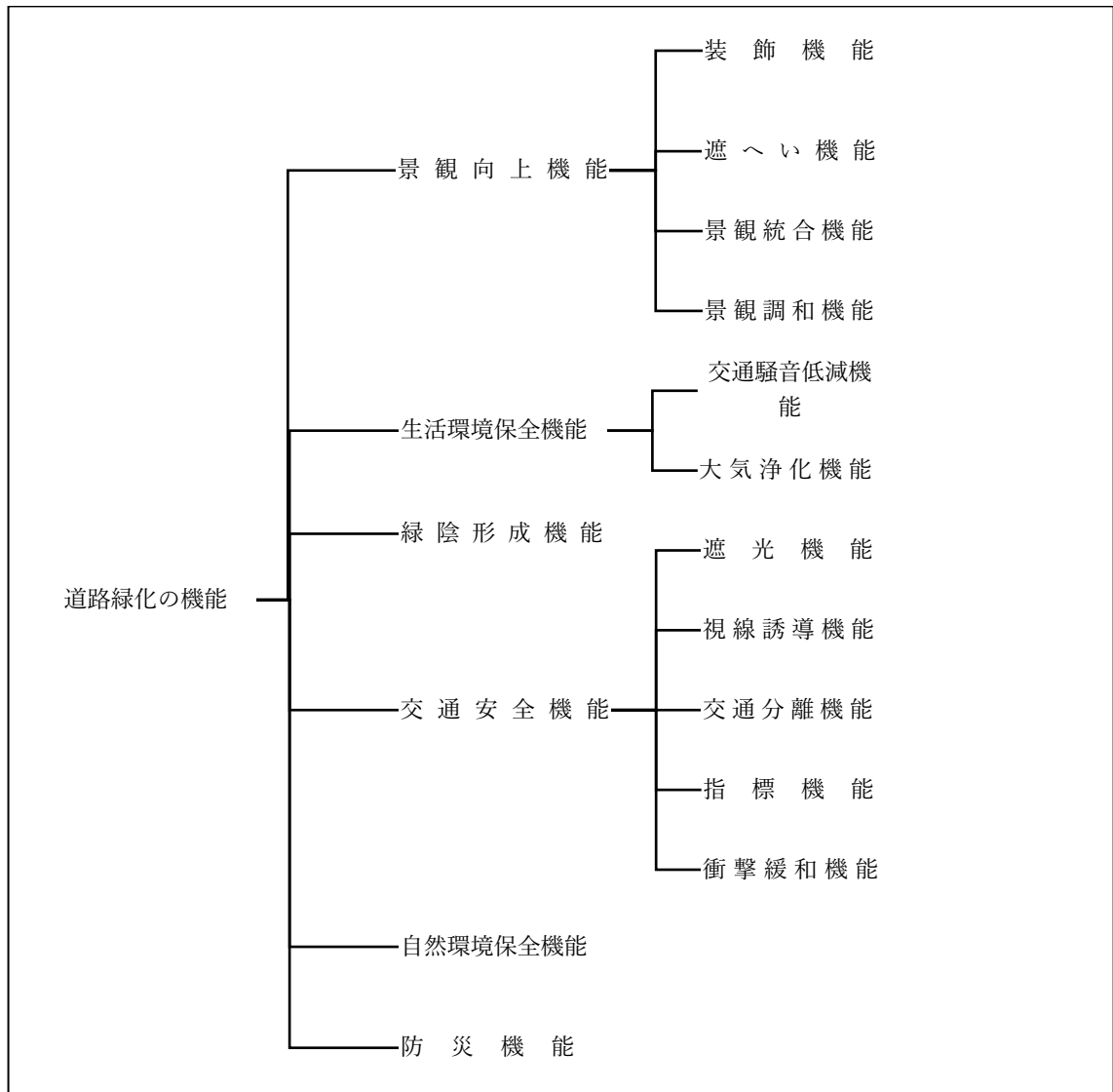
## **2. 街路樹の機能・剪定の目的**



## 2. 街路樹の機能・剪定の目的

### 2.1 街路樹の機能

街路樹を中心とする道路の緑化は、景観向上機能、生活環境保全機能、緑陰形成機能、交通安全機能、自然環境保全機能および防災機能に分類される多くの機能を有している。



出典：「道路緑化技術基準・同解説」（1988年 社団法人 日本道路協会）

以上の機能の他、街路を構成する要素の中で唯一“生命体”であることから、「うるおい」や「やすらぎ」を感じさせ、精神面に与える効果も大きい。

## 2.2 剪定の目的

街路樹の剪定は、「道路の機能・空間との調和」、「景観の創出・維持」、「樹勢の維持」の目的で行う。

剪定の基本は、樹木本来の特性を生かし、均整のとれた樹形や美しい樹冠を作ることであり、できるかぎり自然の樹形を生かして仕立てることが望ましい。

しかし、街路樹の生育環境は厳しく、また求められる条件も多い。倒木や病虫害の発生等を防ぎ、交通安全の支障を除き、路上施設等との調和を図るための剪定や整枝が必要となる。

街路樹の剪定の主な目的は次の通りである。

### 2.2.1 道路の機能・空間との調和

- 視認性を妨げる枝を切り詰め、道路利用者の安全を確保する。
- 道路の建築限界、沿道施設とのクリアランスを保つ。
- 路上施設（照明灯や標識など）や占用物（電柱や架空線など）との調和を図る。
- 風倒や落枝を防止する。
- 緑陰など、街路樹の機能や効果を発揮させる

### 2.2.2 樹勢の維持

- 枝葉の繁茂している樹木は、徒長枝・混み枝を間引き、通風・採光をよくして樹勢を強くし、各種障害への抵抗力を高める。

### 2.2.3 景観の創出・維持

- 不必要な枝葉を剪定することにより樹形を整え、樹種本来の美しさを発揮させ、ひいては良好な道路景観を創出し、維持する。

### **3. 管理目標樹形の設定**



### 3. 管理目標樹形の設定

街路樹の剪定は、その場の空間状況やそこに求められる機能によってその対応は一つとして同じものはないといってよい。そのため、個別の剪定に入る前に、あらかじめ街路樹をとりまく状況を調べ、剪定によってつくり上げる樹形の目標を確認することが重要である。

街路樹の管理計画が重要な理由は、街路樹が日々生長する生命体であり、植栽当初の「若木」、生育途上の「成木」、「老木」といった樹齢による対応の違いの他に、生長に伴う道路空間とのバランスの変化等に応じた短・中・長期の対応が必要なことなど、画一的なマニュアルでは対応できないからである。

管理計画は、まず並木の統一美を図るための「①並木を際立てる剪定」と、これに調和した個々の街路樹の樹形を整えるための「②個別樹木の剪定」について2段階の手順に沿って進めるとよい。

第一段階では、その路線にふさわしい管理目標樹形を設定する。その後に路線の中での樹形のバラツキを少なくするために、個別の樹木について縮小・育成・維持及び樹形再生といった剪定方針を設定する。

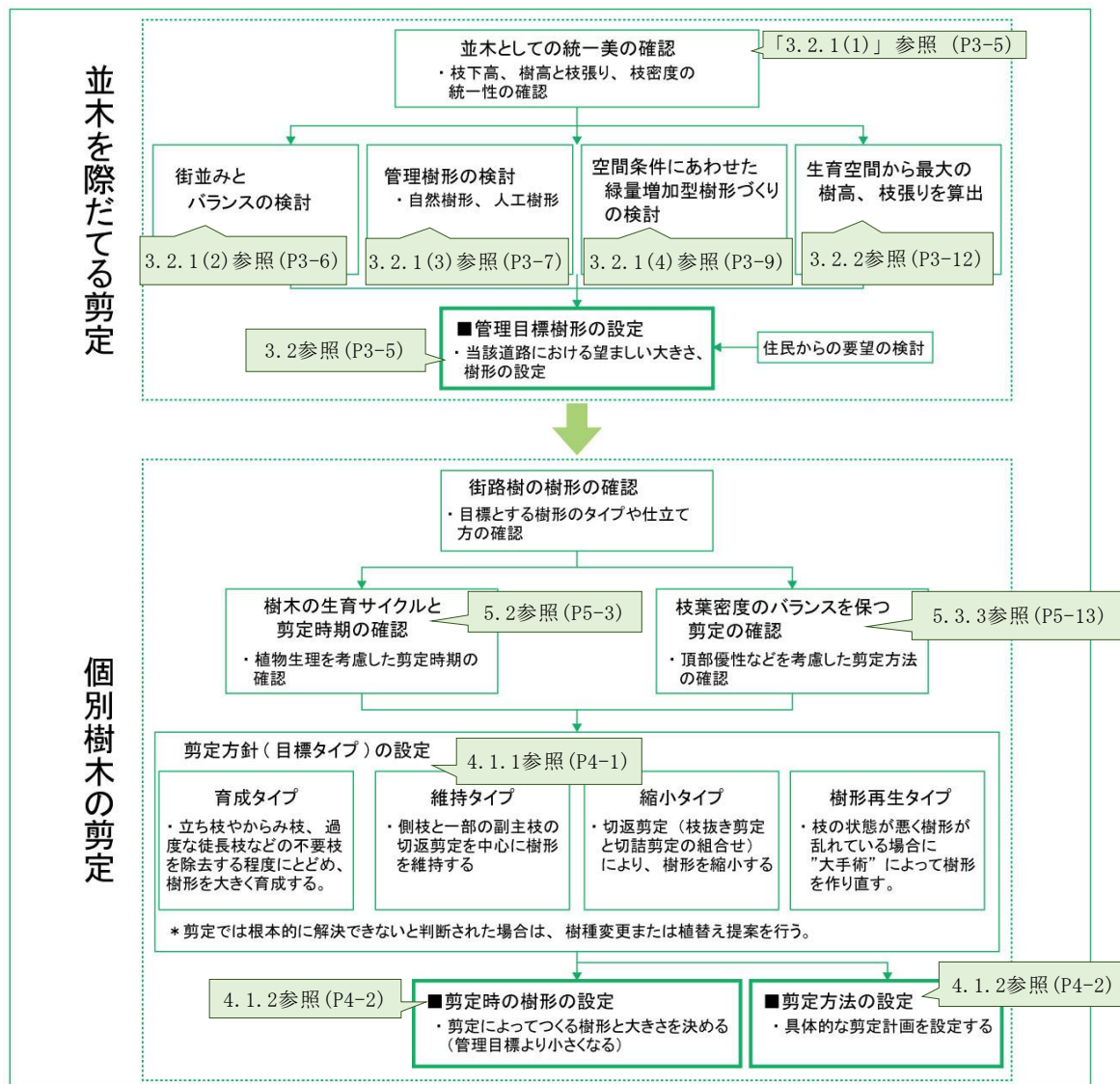
次いで、第二段階では、管理目標樹形の骨格として均整のとれた、剪定時点の樹形を設定する。そのため、剪定時の樹形は管理目標樹形よりは相似的に小さくなる。

上記を踏まえると、街路樹を剪定する際の基本的な留意事項として以下の点が挙げられる。

#### **【街路樹を剪定する際の基本的な留意事項】**

- 漫然と枝葉を除去するだけでは「美しい街路樹」を実現することは困難。
- 道路幅員等の与条件を考慮した目標とする「管理目標樹形の設定」が必要。
- 管理目標樹形となるよう計画的に剪定を実施する。

図 3-1は、管理目標樹形と剪定時の樹形の設定のフローを示したものである。



「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会) を参考に作成

図 3-1 管理目標樹形と剪定時の樹形の設定フロー



### 3.1 現状把握の方法

街路樹の管理目標樹形を設定するため、環境条件、街路樹の状態、苦情等について現状を把握する。

「9巻末資料9.1現状把握シート（案）」参照

#### (1) 環境条件の把握

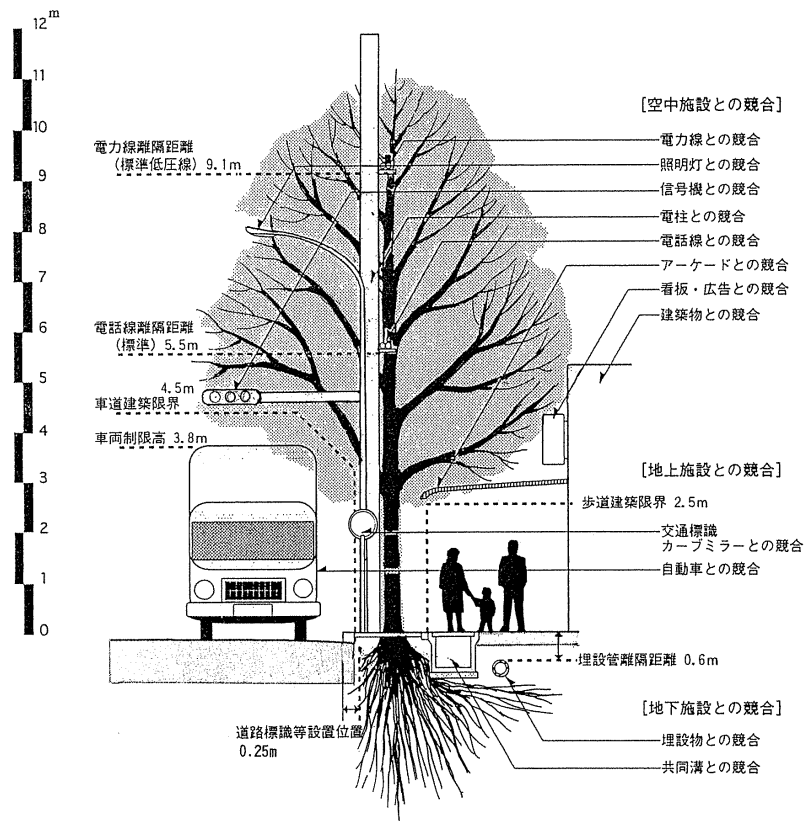
##### 1) 道路を特徴づける条件

立地特性、沿道土地利用、歩車道の利用状況等

##### 2) 街路樹が生育する上での制約条件

- ・「建築限界」内に枝を伸長することができない。
- ・架空線（電力線、電話線）や道路占用物により樹形と大きさが制約される。

#### ■街路樹と競合する施設



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

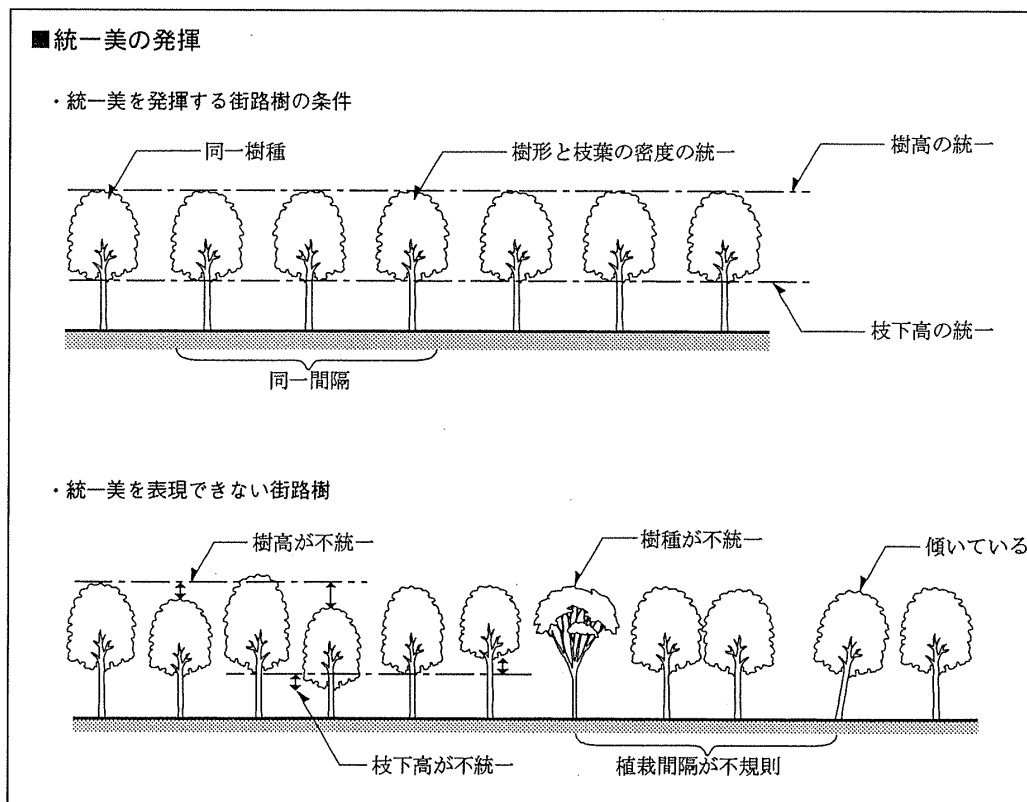
## (2) 並木、樹木の状態把握

### 1) 並木の状態把握

- ・規則的に植栽された並木式の街路樹では、連続する並木の統一美の表現状況を確認する。

### 2) 樹木の状態把握

- ・樹形、形状、管理状況（剪定状況）、病虫害の有無、健全度等を把握する。
- ・形状にバラツキがある場合は、平均タイプ、大きいタイプ、小さいタイプの3タイプについて把握する。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

## (3) 苦情・要望、倒木・枝折れ事故等の状況把握

- ・沿道住民からの街路樹に関する苦情・要望等を把握する。
- ・強風による倒木や枝折れによる事故等を把握する。

### 3.2 管理目標樹形の設定

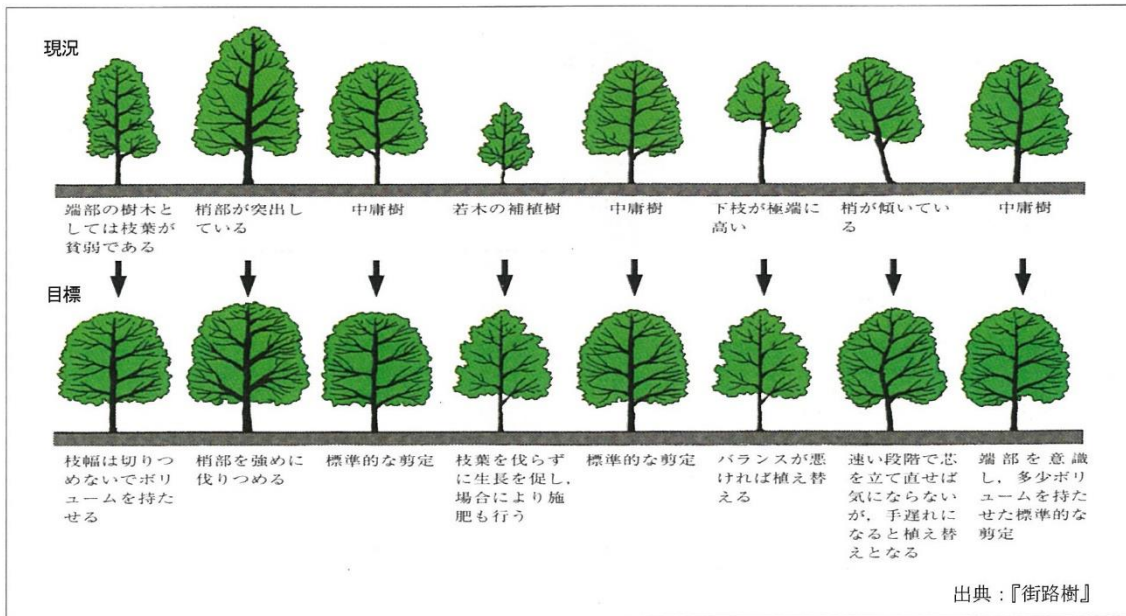
#### 3.2.1 管理目標樹形の検討

街路樹の管理目標樹形を設定するにあたり、次の各項目について検討を行う。

##### (1) 並木としての統一美

「並木としての統一美」に配慮することが重要。

- ・ 枝下高、樹高と枝張り、枝葉の密度を揃える



出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

図 3-2 統一性を重視する街路樹剪定

## (2) 街並みとのバランス

都市景観の雰囲気は、道路幅員や沿道の建築物と街路樹の緑とのバランスの良し悪しによって大きく変わる。

「歩道の幅員」と「車道の幅員」とのバランスに留意し、街路樹の具体的な管理目標樹形を設定する。

### 広い幅員の道路

〈現況〉



・車道幅員も歩道幅員も広い道路に対して、緑量が小さくバランスが悪い

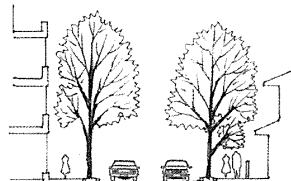
〈目標樹形〉



・道路幅員にあわせてボリュームを増す

### 狭い幅員の道路

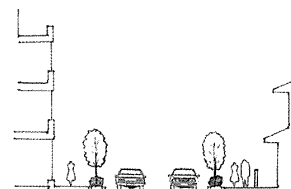
〈現況〉



・車歩道共に狭い道路に対して、樹木が大きすぎてバランスが悪い



・道路幅員にあわせてコンパクトな樹形に整える



・樹種によっては植樹の幅員の中におさめるような樹形に整える

出典：「都市緑化ハンドブック(街路樹編)美しい街路樹をつくる 樹形の作り直し」  
(平成30年 (一社)日本造園建設業協会)

### (3) 樹種の特徴を表した樹形の維持

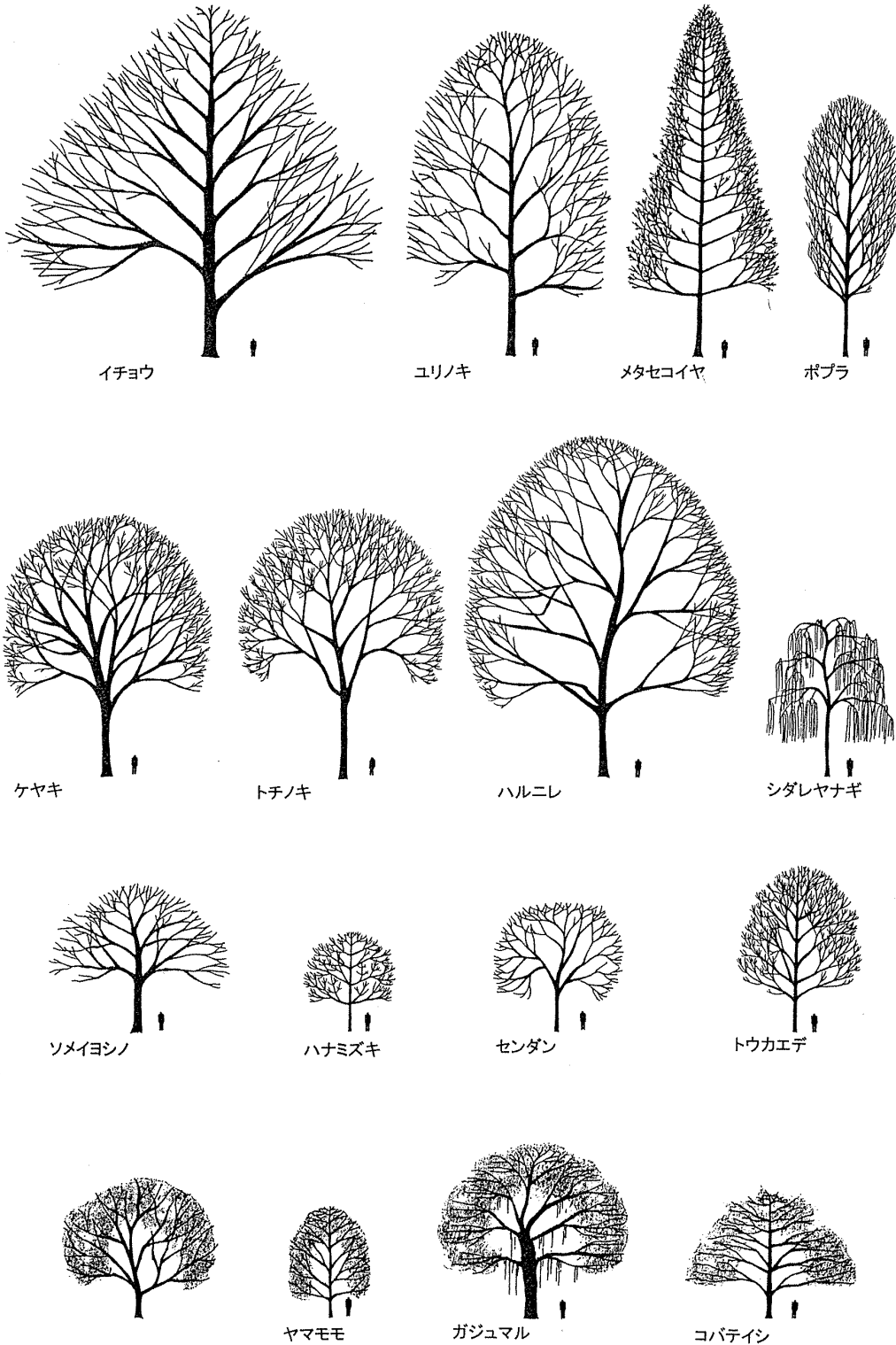
#### 1) 管理目標樹形の設定

樹木は樹種によって「その木らしさ」を感じさせる特有の樹形を有している。道路という限られた空間の中で樹種のもつ自然樹形を尊重した樹形づくりを意識し、目標とする「管理目標樹形の設定」を行う。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

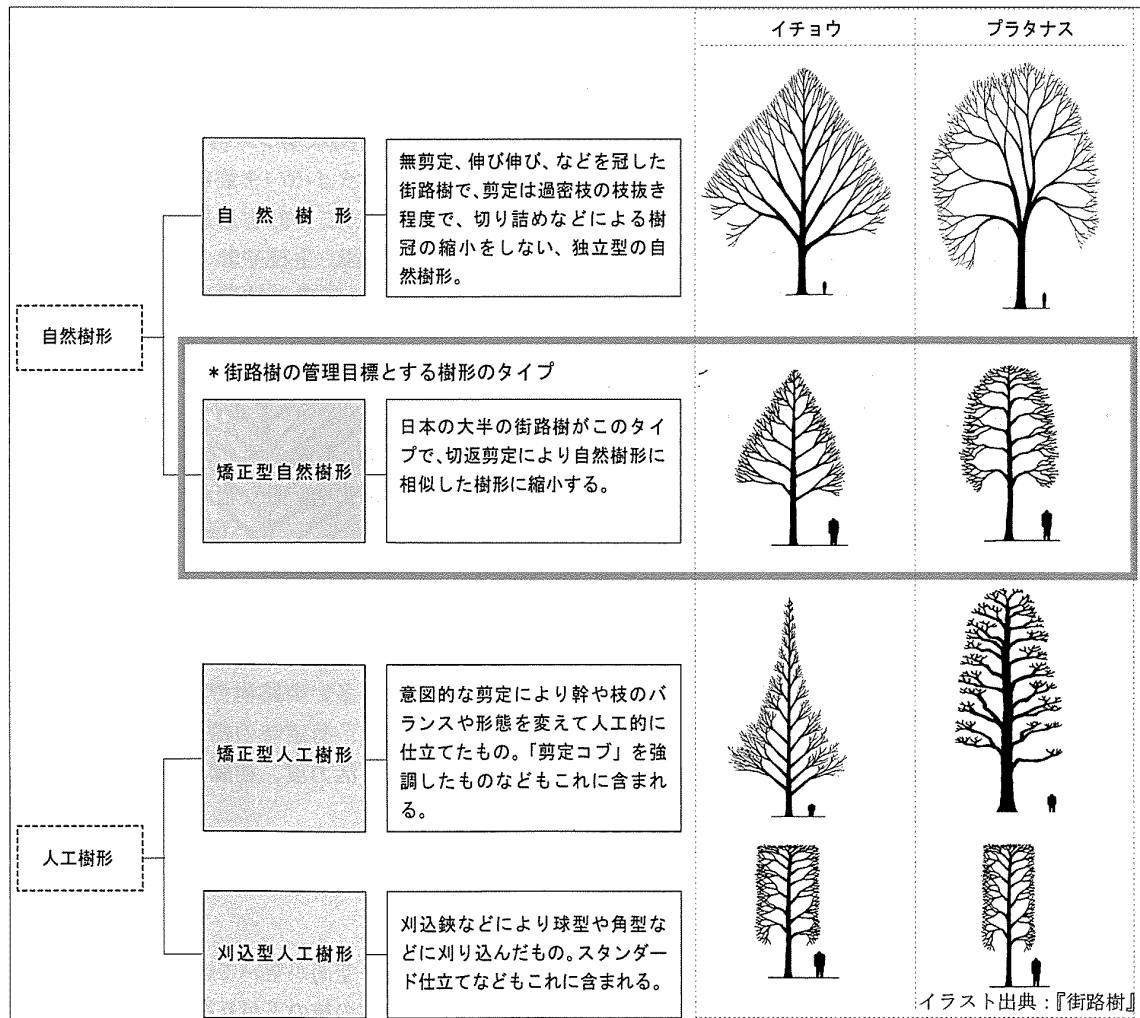
■ 樹種と樹形



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
 （平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

## 2) 管理目標樹形タイプ

街路樹の管理目標樹形タイプは、概ね4タイプに整理することができる。少なくとも、自然樹形をモデルとした「矯正型自然樹形」とするのか、新たな樹形を人工的に矯正した「人工樹形」とするのかを明確にしておく必要がある。



出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

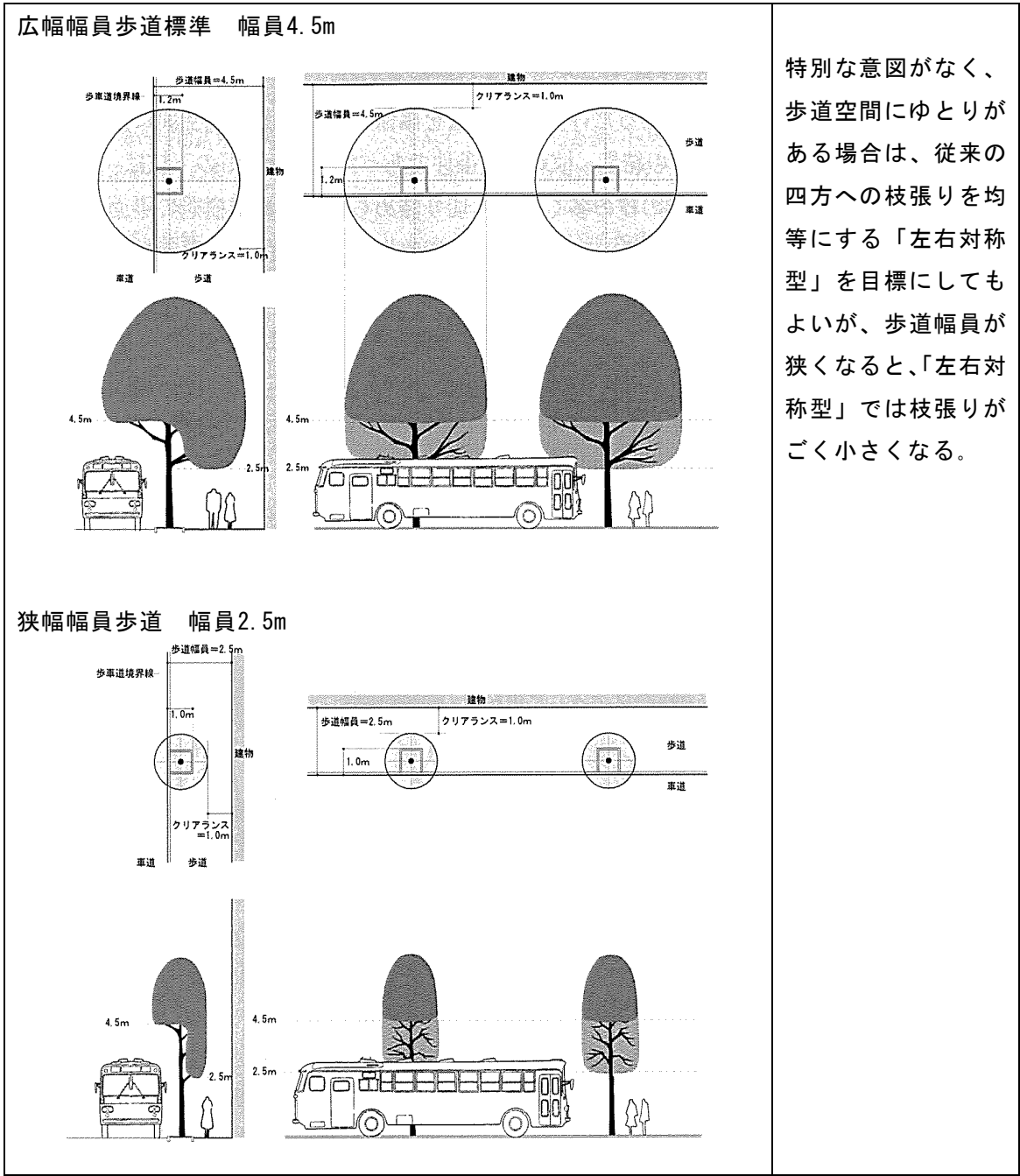
図 3-3 街路樹の管理目標樹形のタイプ

## (4) 空間条件にあわせた緑量増加型樹形づくり

広い幅員の道路における狭小な歩道においては、街路樹が小さくなり、景観的に望ましいものではない。このため、樹形にこだわらず、可能な空間に枝張りを拡大するなどして緑量を増やすことも考えられる（図 3-4、図 3-5参照）。

- ①歩道幅員が狭い場合でも、車道側の枝張りを可能な範囲で伸長させた樹形。
- ②植栽間隔の広狭によって、縦横に楕円形を拡大させた樹形。

緑量増加の樹形



出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
 (平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

図 3-4 従来型の円型樹冠による歩道幅員と緑量の比較



確認事項	確認内容	樹形への制約とニーズ	
1. 歩車道の幅員	歩道側と車道側の制約を確認する。	歩道側は歩道幅員にあわせて扁平横広とし、車道側へはそれに調和させてより広い枝張りを確保する。	
2. 植栽間隔	植栽間隔と現状枝張りを調査し、樹冠と樹冠の離れ具合を確認する。	①植栽間隔が狭い路線	植栽間隔が狭い場合は、縦長の楕円樹形とする。 
		②植栽間隔が広い路線	植栽間隔が広い場合は、道路と平行方向の枝張りを大きくした楕円樹形とする。 
3. 架空線の有無	架空線、特に高圧線の有無を確認する。	高圧線存在路線	高圧線が頭上にある場合は、それよりも低い樹形を設定する。 

出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

図 3-5 緑量増加の樹形づくり

### 3.2.2 生育空間から最大の大きさを算出

対象空間において、対象樹種がその木らしい樹形（望ましい樹高と枝張りのバランス）を維持できる最大の大きさを算出する。

#### (1) 沿道土地利用と歩道幅員から生育可能な枝張りを算出する

- ・沿道土地利用毎にクリアランスを定め、生育が可能な枝張りを算出する。
- ・クリアランスは、下図を参考に沿道の土地利用状況等を考慮し決定する。

枝張り = (歩道幅員 - dx - C) × 2

沿道土地利用分類	クリアランス
オープンスペース 公共施設	C=0m
ビル街	C=0.5m
商店街	C=1.5m
住宅街	C=0.5m
その他（工場等）	C=0

参考：『緑量に関する基礎調査報告書』（東京都 平成4年3月）

出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

(2) 生育可能な枝張りに対する望ましい樹高を、(最大樹高)を算出する。

① 標準的な樹形の比率を元に、目安となる望ましい樹高・枝張り比を設定し、生育可能な枝張りから最大樹高を算出する。

② 算出した生育可能な枝張りを樹高・枝張り比で割ると樹高が算出される。

(例 枝張り 4 m のイチヨウの樹高：4 m ÷ 0.3 = 13 m)

表3-1 樹形タイプ毎の望ましい樹高・枝張り比

樹形タイプ別	『東京都街路樹マスタープラン 検討委員会報告書』 (東京都建設局)	『道路緑化計画・植栽施工・ 管理技術指針』 (建設省九州地方建設局)	望ましい樹高・枝張り比 (目安)
円錐型	・イチヨウ 0.3 ・メタセコイア 0.3	0.2	0.3~0.4
卵円型	・プラタナス 0.5 ・ユリノキ 0.6 ・カツラ 0.4 ・アオギリ 0.7 ・クロガネモチ 0.5 ・シラカシ 0.5 ・コブシ 0.5 ・シンジュ 0.3 ・トウカエデ 0.5 ・モミジバフウ 0.5 ・ハクウンボク 0.6 ・ハナミズキ 0.6 ・ヒメシャラ 0.7 ・ヤマモモ 0.7	0.4	0.4~0.7
球型	・クスノキ 0.6 ・アキニレ 0.5 ・エンジュ 0.5 ・マテバシイ 0.7	0.5	0.5~0.7
盃型	・ケヤキ 0.7 ・トチノキ 0.5 ・ヤマボウシ 0.6  ・ソメイヨシノ 1.0	0.6	0.5~0.7  1.0 (ソメイヨシノ)
枝垂れ型	・シダレヤナギ 0.7		0.7

出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

(3) 剪定作業上の制約による樹高（道路管理上の制限）

東京都第一建設事務所「平成13年度街路樹目標樹形調査委託報告書」より

① 2車線（両側）以上：樹高約10mまで
② 4車線（両側）以上：樹高約18mまで（民地側等の剪定を行うため）
・剪定作業に伴う高所作業車使用上の制約を考慮すると、高所作業車の仕様から2車線（両側）以上で2ト車、4車線（両側）以上で4ト車の使用が一般的に可能。（高所作業車仕様）
2ト車：作業地上高 約10m / アウトリガー幅 約2.0m
4ト車：作業地上高 約21m / アウトリガー幅 約4.0m



## **4. 剪定方針・剪定方法の設定**



## 4. 剪定方針・剪定方法の設定

### 4.1 剪定方針、剪定方法の設定

#### 4.1.1 剪定方針（目標タイプ）の設定

管理目標樹形に向けて現況の樹木をどのように剪定するのか方針を決める。  
剪定方針は、表4-1に示す通り管理目標樹形に応じて検討する必要がある。

表4-1 管理目標樹形に応じた剪定方針及び留意点

目標タイプ		剪定方針及び留意点
自然樹形	育成タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然樹形を維持しながら樹形を拡大し、ボリュームアップを図る。</li> <li>・「枝透かし剪定」を基本に、徒長枝、からみ枝、さかさ枝、平行枝、立枝等切除すべき枝を中心に間引く。</li> <li>・将来樹形（最終目標）を考慮しながら、早い段階で樹形づくりをはじめることが重要である。それによって、大きくなってから強剪定によって樹形を乱すことを回避する。この場合は、「切返し剪定」を基本とする。</li> </ul>
	維持タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然樹形で大きさを現状維持していく。</li> <li>・「切返し剪定」を基本に、自然樹形の柔らかさを維持する。</li> <li>・適切な切返し剪定が行われないと自然樹形を維持できないので、切詰剪定にならないよう留意する必要がある。</li> </ul>
	縮小タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然樹形を維持しながらコンパクトに縮小する。（自然相似形）</li> <li>・「切返し剪定」と「枝おろし剪定」を基本に、樹形を縮小しながら自然樹形を維持する。</li> <li>・太枝を剪定する手法をとることになるため、切り口からの腐れの侵入を回避する措置が必要である。（防腐剤の塗布等）</li> </ul>
	樹形再生タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現状の乱れた樹形を自然樹形に再生する。</li> <li>・「切返し剪定」や「切詰剪定」等を組み合わせて、将来の樹形再生過程を考慮しながら比較的大きな剪定を行う。（大きな切り口には防腐剤塗布を要す。）</li> <li>・乱れた樹形を“大手術”によって再生し自然樹形を取り戻すために、3～5ヶ年程度の管理計画を作成し、計画的に管理を実施する必要がある。</li> <li>・瘤取り作業を含む場合は、このタイプ。</li> </ul>
人工樹形	育成タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「切詰剪定」を基本に、人工樹形に管理しながら樹形を拡大し、ボリュームアップを図る。</li> <li>・樹形づくりの際に、枝葉を伐りすぎて樹形を縮小しすぎないように留意する。</li> </ul>
	維持タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「切詰剪定」を基本に、樹形を現状維持でコントロールする。</li> <li>・現状維持の剪定を続けていくため、剪定による瘤を生じやすいので、その回避が必要である。</li> </ul>
	縮小タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「切詰剪定」を基本に、人工樹形でコンパクトに縮小する。（大きな切り口には防腐剤塗布を要す。）</li> <li>・切り口から翌年小枝が多く発生するので、それを整理する管理を予定しておく必要がある。</li> </ul>
	樹形再生タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「切詰剪定」を基本に、人工樹形で樹形を再生させる。</li> <li>・3～5ヶ年程度の管理計画を作成し、計画的に管理を実施する必要がある。</li> <li>・その他は同上。</li> <li>・瘤取り作業を含む場合は、このタイプ。</li> </ul>

#### 4.1.2 剪定時の樹形の設定

現在の枝の状況（枝つきのバランス、枝葉密度、枝の構成、コブの有無）管理条件、剪定後の伸長量の見込みを考慮し剪定時の樹冠を決める（図 5-3及び以下参照）。

##### 剪定方針検討の際のチェックシート

###### ■現在の枝の状況

###### ○枝つきのバランス

枝が四方にバランスよく伸びているか確認し、骨格となる枝がなく、空間が空いているところでは、小さな枝がある場合、その枝を育てるように残し、枝がない場合は、上方の枝の下がり枝や下方の立ち気味の枝を残すように剪定樹形設定をする。

逆に骨格となる枝が集中しているところでは、上下の枝の間隔を考慮して間引くように剪定樹形を設定する。

###### ○枝葉密度

頂部優性の影響の程度を確認し、頂部の枝葉の密度が高すぎる場合は、上方枝：中間枝：下方枝＝1：2：3の割合を目安として枝葉の密度を調整する。

###### ○主枝（一番枝）、副主枝（二番枝）、側枝（三番枝）の構成

主枝、副主枝、側枝の長さの割合と密度が、バランスよく構成されるように剪定樹形を設定する。

###### ○コブの有無

枝の同じ部位で剪定を繰り返すことによって生じるコブの有無を確認し、コブが存在する場合は、コブを除去するか、コブのある人工樹形と位置づけるかによって剪定方針を立てる。（P5-21参照）

###### ■管理条件

対象路線の管理条件（管理内容の種類と頻度）を確認し、夏期剪定を行うか否か、冬期剪定が毎年行われるか隔年か等を確認し、その条件に応じた剪定量を検討し剪定樹形を決定する。

###### ■剪定後の枝の伸長量の見込み

樹齢や剪定部の位置、根の状態等多様な要因によって枝の伸長量は異なり、また、剪定条件にも大きく影響してくる。

これらを勘案しながら、剪定後の伸長傾向を予測し（具体的には、対象樹木のこれまでの枝の伸長状況を観察して伸長量を予測する）、それに応じた剪定樹形を設定する。



#### 4.1.3 剪定方法の設定

- ・具体的な剪定計画を設定する。
- ・縮小タイプ、樹形再生タイプについては、3～5年の管理計画を作成する。

「4.2目標タイプ別の剪定」参照

「9巻末資料9.2ケーススタディ（ケヤキ）」参照

#### 4.2 目標タイプ別の剪定

ここでは、「3.2.1管理目標樹形の検討」で設定した目標タイプ（P3-9）毎に剪定方法を示す。

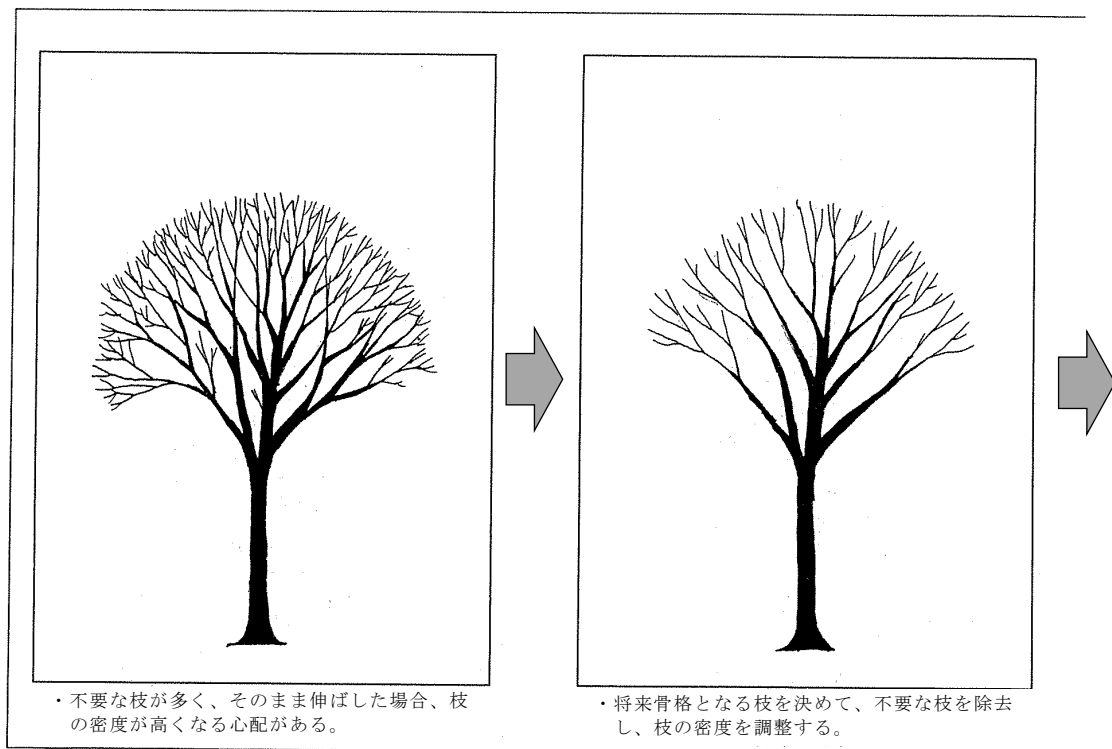
なお、全てのタイプにおいて、並木としての統一性を意識すること、頂部優性を意識した枝葉密度の調整（頂上枝：中間枝：下方枝＝1：2：3）を図ること、上方枝から剪定をはじめ下がりながら形を整えていくことを基本とする。

#### 4.2.1 自然樹形で仕立てるタイプの剪定

##### (1) 自然樹形—育成タイプ

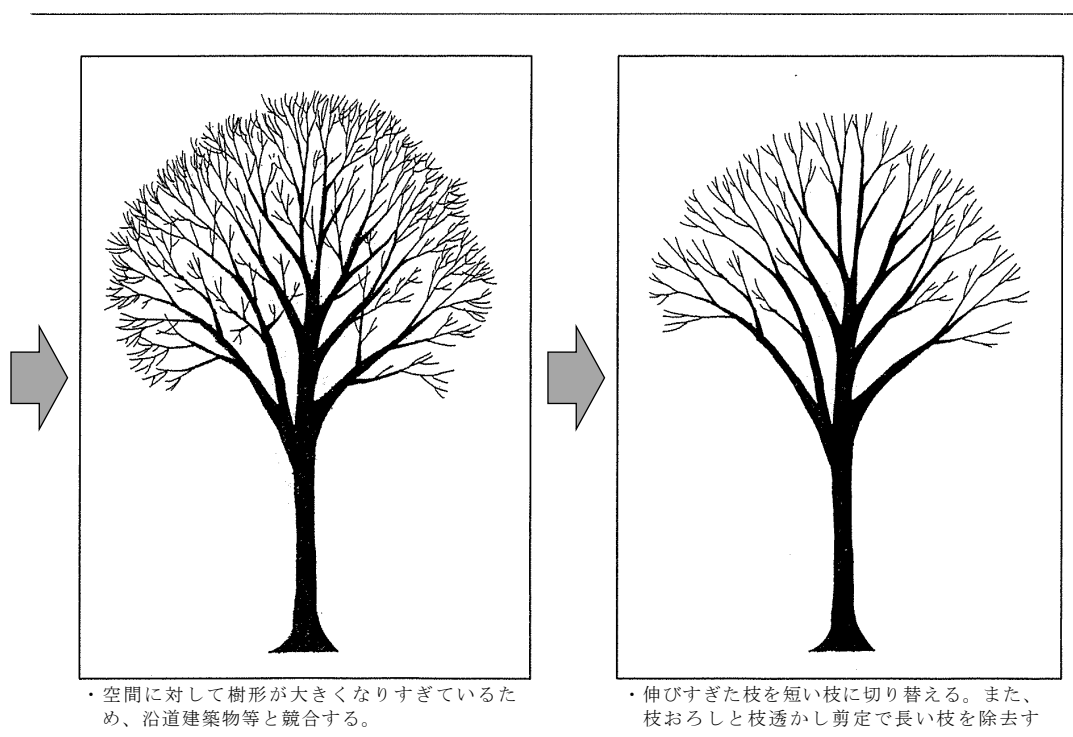
〔目 標〕：・自然樹形を維持しながら、現在の樹形を拡大する。  
・良好な自然樹形を維持しながら育成し、緑量のボリュームアップを図る。

〔剪定方法〕：・自然樹形の柔らかさを維持しながら成長させていくため、枝透かし剪定と切返し剪定を基本とし、切詰剪定は原則として行わない。  
・大きさを縮小しないため、徒長枝、からみ枝、さかさ枝、平行枝、立枝等の不要な枝を除去する程度の剪定に留める。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

- ・また、早い段階から骨格となる枝を決めて密度を調整しておく。
- ・枝の密度が高いまま成長させると、ケヤキなどでは樹冠内部の枝が枯れて、樹冠が上部に片寄ってしまう。また、大きく成長した後に太くなった枝をおろすと、そこから腐れが入ったり、樹形が乱れたりする原因となる。



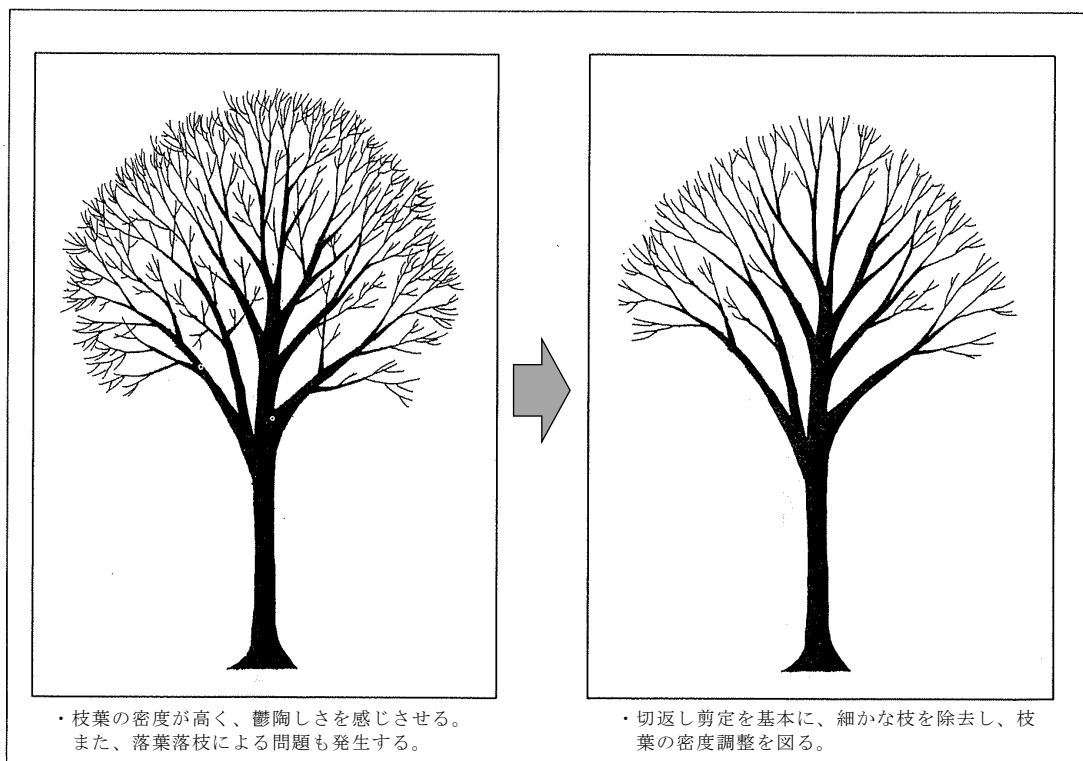
出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
 （平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

## (2) 自然樹形—維持タイプ

〔目 標〕：・自然樹形を維持しながら、大きさも維持していく。

〔剪定方法〕：・自然樹形の柔らかさを維持しながら大きさも維持していくため、  
切返し剪定を原則とする。

- ・長く伸びた枝を短い枝に切り替えて樹形をコントロールしていく。
- ・切り替える枝がない場合は、定芽の位置で切り詰めて、新しく枝が伸長するのを待つ。切り替えに都合のよい新しい枝が伸長したら、その枝に切り替える。
- ・したがって、切り替える枝を育てながら、順次成長して伸びた枝を短い枝に切り替えていく。そのため、計画的な切り替えし剪定が必要となる。

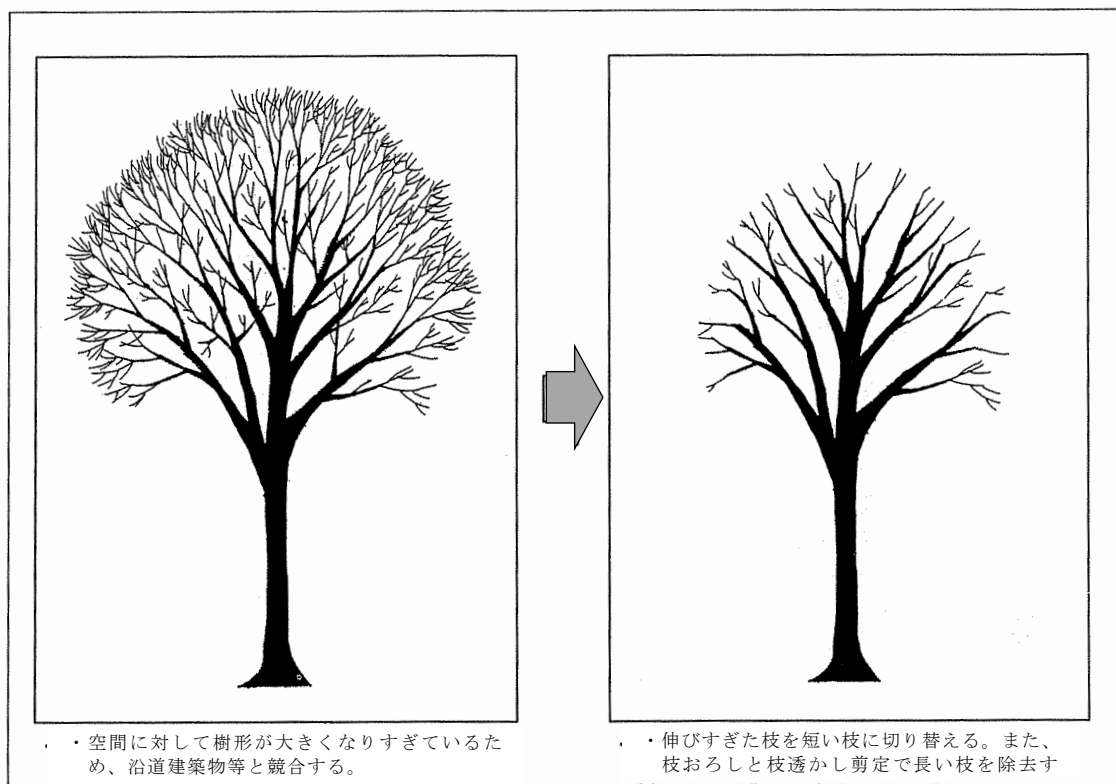


出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

### (3) 自然樹形—縮小タイプ

〔目 標〕：・自然樹形を維持しながら、コンパクトに縮小する。

- 〔剪定方法〕：・自然樹形の柔らかさを維持しながら縮小するため、切返し剪定と枝おろし剪定・枝透かし剪定を基本とする。
- ・枝おろし剪定では太枝をおろすケースが多くなるため、カルスが早期に形成されるよう剪定位置（P5-11参照）に留意し、さらに防腐剤を塗布する。
  - ・はじめに除去する太枝を決めてカットする。その際には、二段伐りを原則とし、切り口の剥皮を回避する（P5-10参照）。
  - ・次いで徒長枝、からみ枝、さかさ枝、平行枝、立枝等の不要な枝を除去する。
  - ・残す骨格枝は、伸びすぎているものを短い枝に切り替えて、樹高・樹冠幅を調整する。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

#### (4) 自然樹形—樹形再生タイプ

〔目 標〕：・乱れた樹形を“大手術”によって再生し、主枝を作り直して自然樹形を取り戻す。

・瘤がある場合は取り除き、ごつごつした樹形を解消する。

〔剪定方法〕：・将来（5～10年先）の理想的な樹形を想定して“樹形再生剪定”を行う。

・“大手術”によって樹形を作り直すため、切詰剪定、切返し剪定、枝おろし剪定の全ての手法を用いて剪定する。

・瘤がある場合は切除する。

・なお、切詰剪定は、“斜め伐り”（P5-12参照）の原則を遵守し、樹形の柔らかさを少しでも維持するように配慮する。

・また、太枝を切断する付近に小枝がある場合は、その位置で小枝を残して極力切返し剪定で行う。

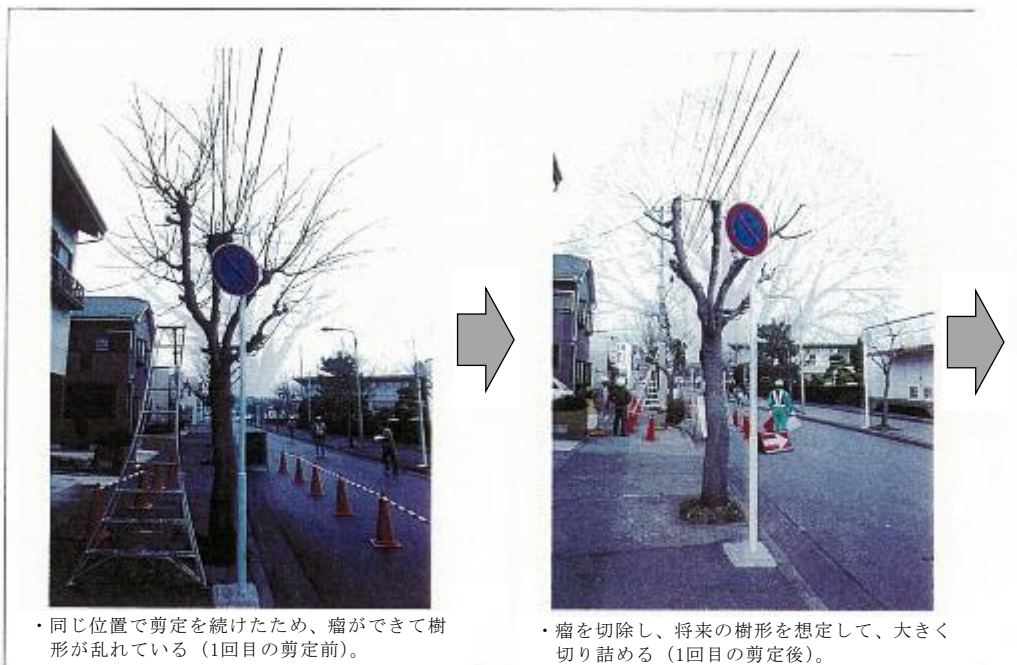
・大枝から切除し、枝の空き具合を見ながら小枝を整理する。

・強剪定によって、新たに伸びてくる枝を育てて樹形を作り直すことになるため、その後の管理が特に重要である。

・そのため、剪定後3年間程度は以下のような管理を実施する。

①一年目：切り口から小枝が十数本発生するため、将来伸ばすの  
によい枝を3～4本程度決めて、その他は除去する。

（風や雪等によって枝折れする心配があるため、予備として3～4本残す）。

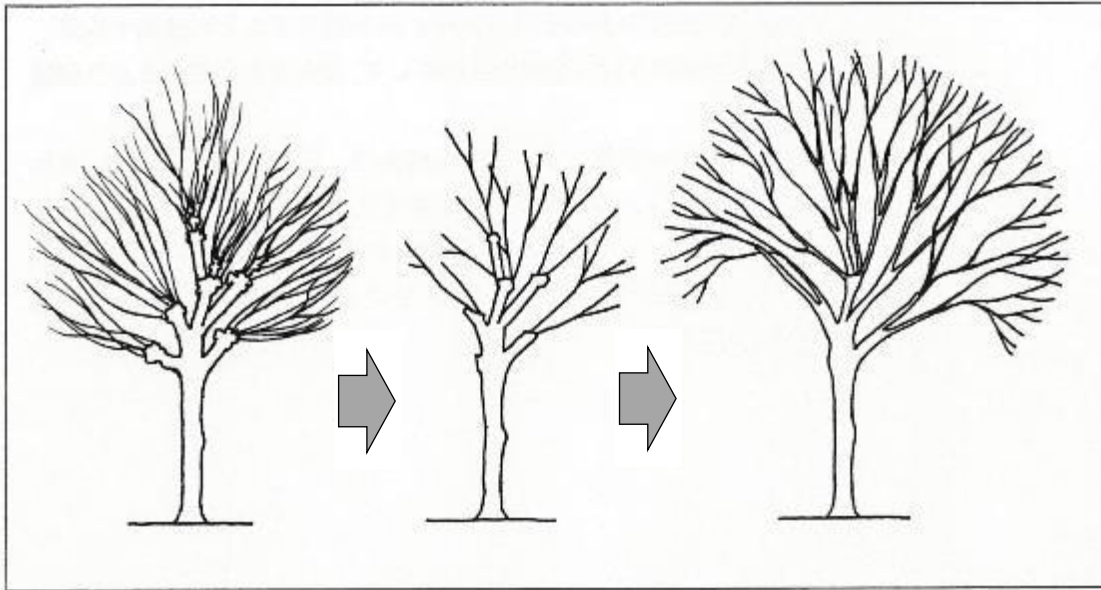


出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

②二年目：剪定は行わず様子を見る（残した枝が折れた時等は、除去する）。

③三年目：本格的な整姿剪定を実施する。この時になると残した枝の強弱や伸びる方向がはっきりするため、さらに枝数を絞る（3～4本→1～2本）。

空間での管理目標樹形（樹冠の大きさと形）と枝の伸長量を見極めて、剪定樹形を決める。



・切り口から十数本発生する新しい枝を数本に間引き、将来の骨格枝を決める（3回目の剪定前）。

・目標とする樹冠の大きさと新出する枝の伸長量を見極めて、剪定樹形を決める（3回目の剪定後）。

出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

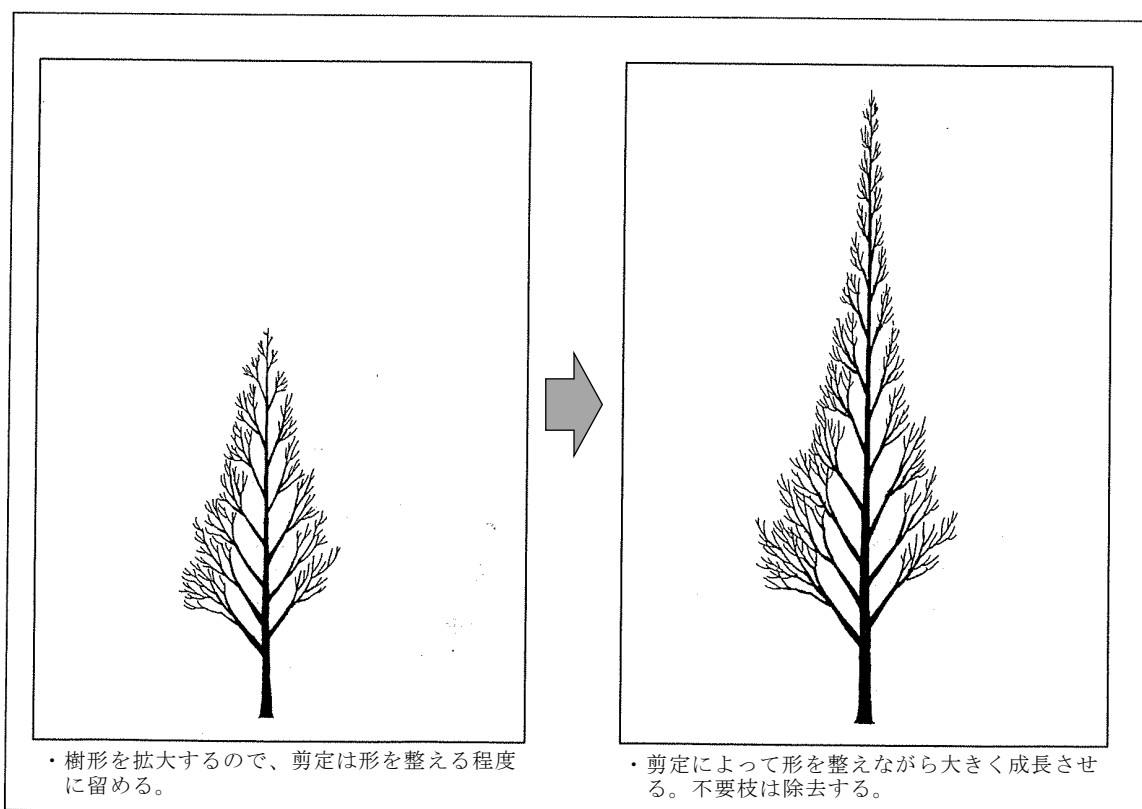
## 4.2.2 人工樹形で仕立てるタイプの剪定

### (1) 人工樹形—育成タイプ

〔目 標〕：・人工的に樹形を管理しながら拡大し、緑量のボリュームアップを図る。

〔剪定方法〕：・樹形を拡大していくので、切詰剪定を基本とし、樹形を整えることを優先させる。

- ・頂上枝では切返し剪定を主体にして、柔らかさを表現するよう留意する。
- ・また、イチョウ等、芯を立てる場合は、はじめに芯を決め、それを中心にバランスをとりながら形を決めていく。
- ・全体的には、はじめに切除の対象となる枝（不要枝 p3参照）を除去し、その後に残す枝で形を整えていく。この時、樹形を縮小しないよう留意する。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

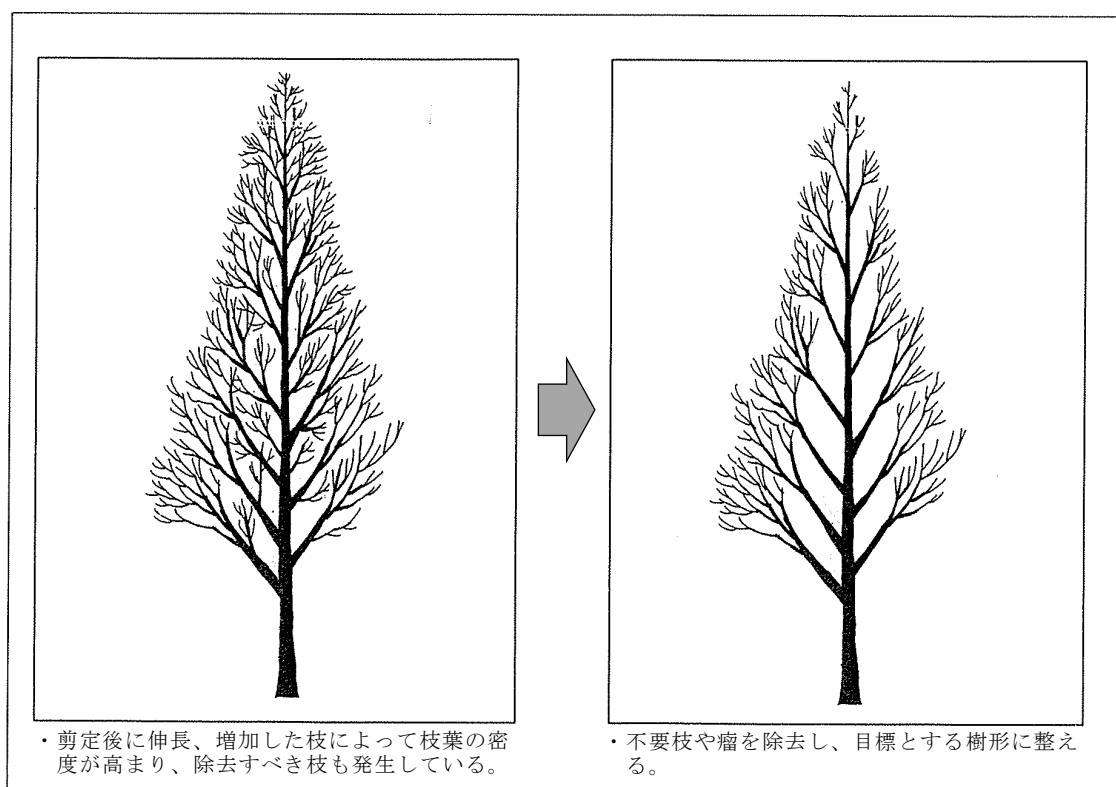


## (2) 人工樹形—維持タイプ

〔目 標〕：・人工的に樹形を管理しながら、現状の大きさを維持する。

〔剪定方法〕：・現状の大きさを維持するため、伸長量に応じて枝を切り詰めて、樹形をコントロールする。

- ・このタイプは、同じ位置で剪定が繰り返されるが多いため、剪定による瘤が発生しやすくなる。
- ・瘤が目立つようになった場合は、切返し剪定によって瘤を切除して枝を切り替える。
- ・そのため、切り替え用の枝を育てながら、剪定位置を変化させて、大きさを一定に維持する必要がある。
- ・このタイプも前のタイプ（育成）と同様、イチョウ等芯を立てる場合は、はじめに芯を決め、それを中心にバランスをとりながら形を決めていく。



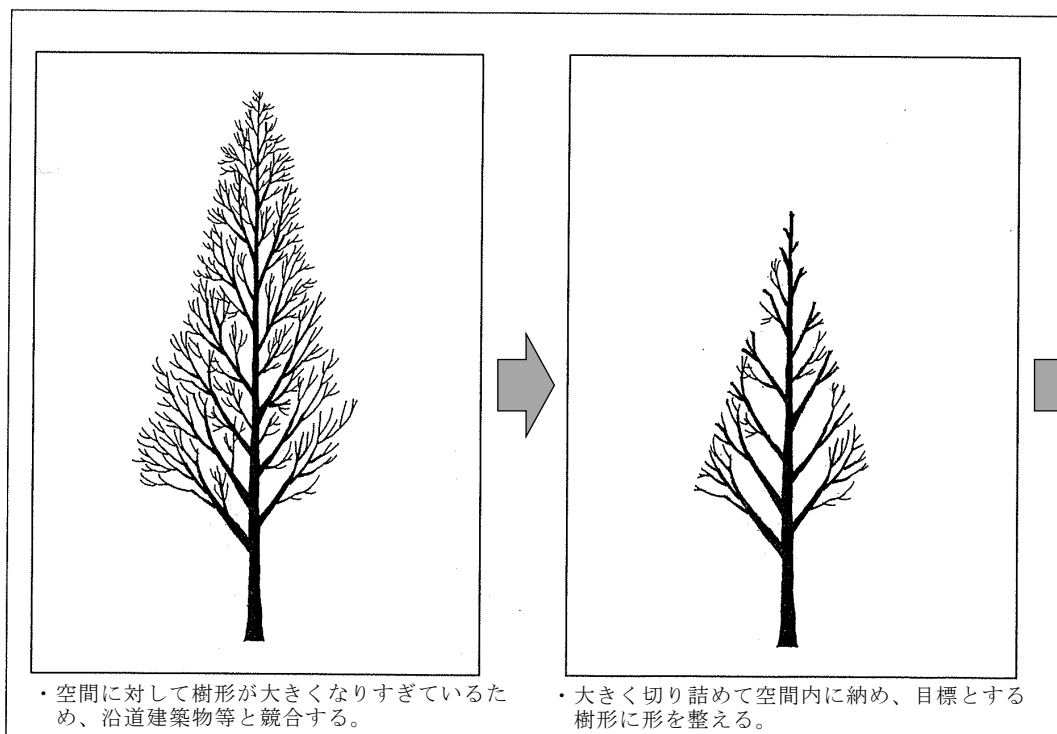
出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

### (3) 人工樹形—縮小タイプ

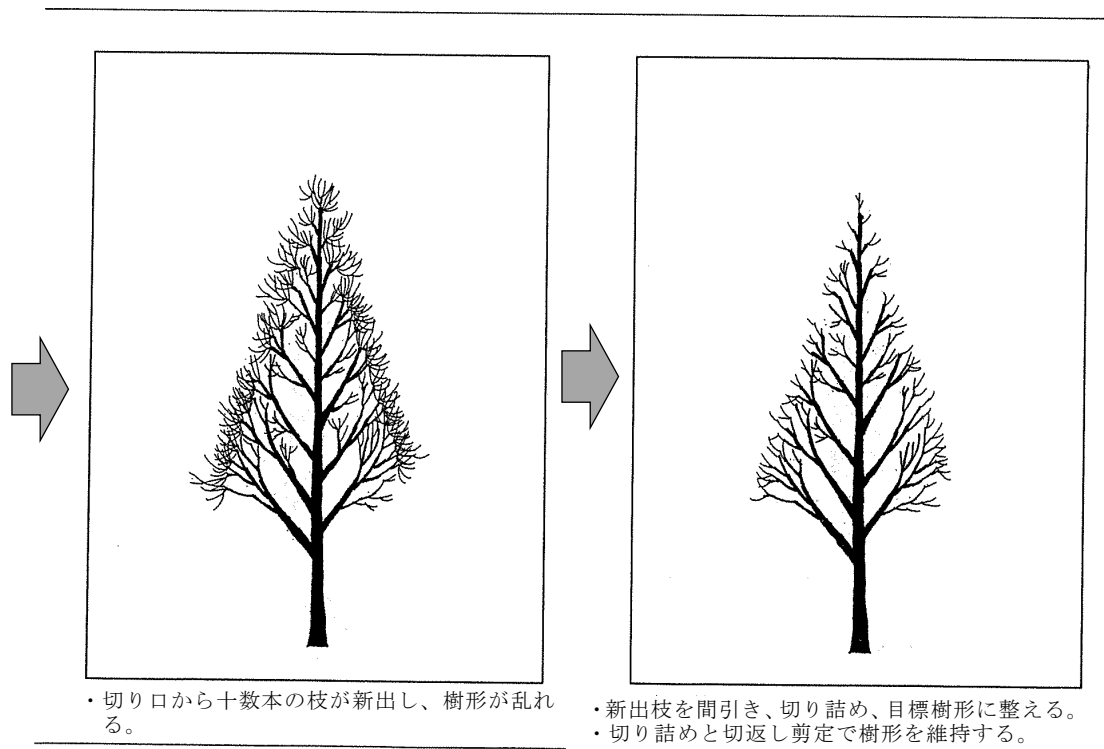
〔目 標〕：・人工樹形で大きさをコンパクトに縮小する。

〔剪定方法〕：・切詰剪定を基本に、樹形を縮小しながら人工的に整える。

- ・全体的に強剪定となり、ごつごつした樹形になりやすいので、下方枝の剪定では、切返し剪定も加えて、柔らかさを保つように配慮する。
- ・大きな切り口が発生するので、防腐剤を塗布して腐れを回避する。
- ・一年目に大きさを決めて縮小した後は、その大きさに維持することになるため、二年目以降は、「維持タイプ」と同様の剪定方法となる。
- ・なお、現状の大きさが、目標の大きさより著しく大きく成長しており、かなり強い剪定を必要とする場合は、植え替え等の対策を検討する必要がある。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

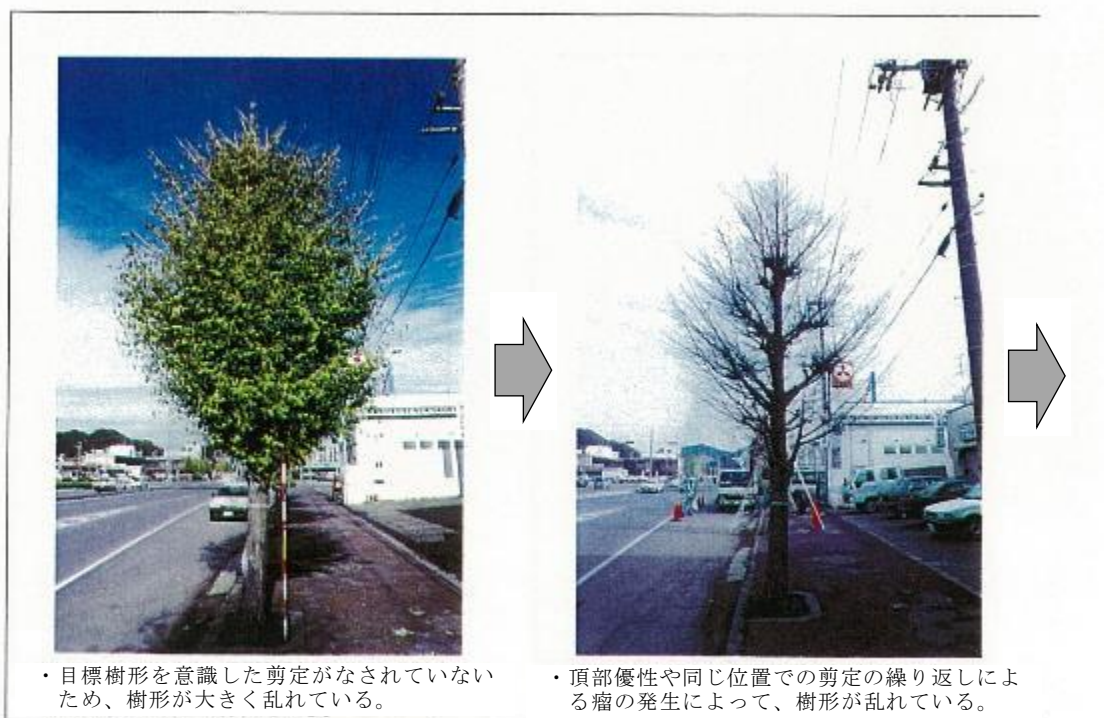


出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

#### (4) 人工樹形—樹形再生タイプ

- 〔目 標〕：・乱れた樹形を大きな剪定によって整え直す。  
・瘤がある場合は取り除き、ごつごつした樹形を解消する。

- 〔剪定方法〕：・目標とする人工樹形を再確認し、基本的には上方では切詰剪定を、下方では切返し剪定を併用して樹形を作り直す。  
・樹形の骨格を形成する主枝を決めて、数年後の樹形再生を見極めて、大胆に剪定する。  
・なお、イチョウの場合、枝が主幹から45度程度で立ち上がると美しいイチョウらしさが表現されるため、これを意識して主枝を決めていく。  
・また、イチョウは特に頂部優性が強いため、頂部の枝は1本に整理し、上方枝は分枝を少なく短くする。下方になるにつれて分枝を多く長めに残し生育の調整を図る。



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）



出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」  
 （平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）



## **5. 剪定の基本技術**





## 5. 剪定の基本技術

街路樹剪定の基本は、望ましい街路樹の姿を実現するため、以下の3つを基本的な考え方とする。

### 剪定の基本を忠実に守り、柔らかな樹形をつくる

- ・「切詰剪定」「切返し剪定」「枝おろし剪定」「枝透かし剪定」の各剪定手法において、その基本を忠実に守ることによって、枝の元から先に向かってしだいに細くなる自然な柔らかい枝の姿を保つことができる。それによって、柔らかな樹形を創出する。

### 頂部優性を意識し、その木らしいバランスのよい樹冠をつくる

- ・樹木の一般的な性質である頂部優性を意識し、先端部の枝葉を強めに剪定し、下がるほど弱く剪定するようにする。下方枝は衰退してなくなると再発生があまり望めないため慎重に扱う。
- ・また、樹種に応じてその木らしさが表現できるような樹形づくりを行う。

### 全体の樹高、下枝高、枝葉密度を統一し、並木の統一美を表現する

- ・作業に取りかかる前に並木全体を概観し、平均的な高さ等を目安に剪定で目標（最終的な目標ではない）とする樹高、枝下高、枝葉密度を設定する。
- ・樹高の統一では、高いものは低めに抑え、低いものは生長させるようにする。

※頂部優性：樹木の一般的な性質として、下方部より頂上部の生長が旺盛なことをいう。

## 5.1 美しい街路樹を実現するための留意点

美しい街路樹を実現するために剪定の果たす役割は大きい。

現在の街路樹の剪定状況を概観してみると、多くの問題点を抱えているが、次の点に留意して美しい街路樹を取り戻したい。

### ●剪定の基本を守ろう！

- ・「切詰剪定」、「切返し剪定」、「枝おろし剪定」、「枝透かし剪定」それぞれの手法の基本を守る。
- ・カットする位置、向き、角度等を正しく剪定することによって、枯れ下がる枝や瘤の発生を防ぎ、見苦しい樹形を回避することができる。
- ・剪定の基本を守るだけで、かなり街路樹は美しくなるはずである。

### ●樹木の頂部優性の特性を考慮した剪定をしよう！

- ・樹木の一般的な性質として、下方部より頂上部の生長が旺盛になる“頂部優性生長”の特徴がある。そのため、生育するにしたがって先端部の枝葉の生長がよく、下方部は次第に勢力がなくなり衰えていく傾向がある。
- ・街路樹を剪定する時は、この性質を理解し、先端部では強めに、下方部では弱めに剪定し、バランスのとれた樹冠づくりを行おう！
- ・剪定管理とは、この頂部優性を調節することだと言っても過言ではない。

### ●その木らしい樹形を創出しよう！

- ・樹木は、それぞれの木らしさを感じさせる樹形を持っている。ケヤキ、イチョウ、プラタナス等樹種が変われば当然樹形も異なってくる。これは自然樹形だけでなく、人工樹形もその木の樹形の特徴を考慮してつくられるため、その木らしさが表れる。
- ・これらの樹種それぞれの樹形を意識して、“その木らしさ”を創出するような剪定を心がける。

### ●並木の統一美を表現しよう！

- ・規則式植栽の一般的な街路樹は、基本的に同一樹種が同形・同大で列植され、統一美を表現することが求められる。
- ・樹高や下枝高、枝葉の密度を統一して、“並木の統一美”を表現する。

## 5.2 樹木の生育サイクルと剪定時期

### 5.2.1 剪定の時期と要点

表 5-1 東京における剪定の時期

月 別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
生育変化	→	休眠 →	水上 →	① 萌芽・属葉	新梢伸長 →	成葉 →	② 再伸長 →	充実肥大 →	③	④ 落葉 →	休眠 →	
養分変化		貯蔵・休眠	消費生長期				蓄積成長期				貯蔵	休眠
剪定時期	落葉		冬期剪定				夏期剪定				冬期剪定	
	常葉		冬期剪定			夏期剪定			冬期剪定			

「街路樹の剪定」(1985年 藤田昇)を参考に作成

剪定は、生きた樹木の組織を切り取る作業である。人にたとえれば手術にあたるもので、床屋での散髪とは意味が違う。手術である以上その実行にあたっては、対象となる樹木の生理状態を熟知していなければならない。

伝統的な日本の庭師の剪定は、このような樹木の生理を十分に配慮した技術として受け継がれてきた。

その原則として、樹木が活動している期間に剪定すればダメージが大きく、休眠期または緩い生長期に行えば、痛手を最小限とすることができるということを基本において伝承されてきた。そのため、剪定の適期は、落葉樹は晩秋から早春の芽出し前の落葉期間と、常緑樹も含め、一時葉の生長が緩慢になり、寒さの影響を受けない夏の頃とされてきた。

街路樹も、この期間を基本的な剪定時期としている。

#### (1) 冬期剪定

落葉樹はダメージを最小限度とするために休眠している冬期に行い、枝のバランスを見ながら樹木全体の骨格をつくる。落葉樹の多い街路樹の基本的な剪定で、「整枝剪定」ともいう。寒さに強い常緑針葉樹の枝抜きや軽い切り詰めもこの時期が適期である。

特に樹形再生などのように強く切り詰める場合は、樹木の負担の少ないこの時期に行う。ただし、寒さに弱い暖地性の樹種の中には、切り口から枯れ下がるものもあるので、その場合は時期を寒さの緩む後半にずらすようにする。

剪定の要点は、「並木としての統一美」のための「樹高の統一」と「枝幅の統一」の調整を意識しながら、「枝の密度」と「枝のバランス」を整えることである。また、花を觀賞する種については、花芽の分化期を考慮して慎重に行う。

## (2) 夏期剪定

冬期に剪定した落葉樹の枝から萌芽した枝の密度調整や乱れた樹冠を整える目的で行われる剪定で、「整姿剪定」ともいい、「樹冠内の風通し」を良くし、「病虫害の発生」を防ぎ、台風などによる「風倒防止」にも有効である。

常緑樹の枝抜きもこの時期が適期であるが、いずれも着葉している時期に行うので、枝葉の切除の量は全量の1/3以下とし、出来るだけ樹木への負担を軽くすることが重要である。

このため「夏期剪定」は、全ての樹木に対して行う必要はなく、強い冬期剪定による樹冠の乱れのひどいものや枝葉の生長が旺盛な樹木に限って行うのが望ましい。

以上が、街路樹の基本的な剪定であり、これ以外の季節に剪定を行うのは、特別の理由がない限り行わない。特に樹木の健康上からも街路樹機能の面からも剪定を絶対に避けなくてはならないのは、「春の若葉の展開期の剪定」「夏期の強い剪定」「秋早い剪定」「暖地性の常緑広葉樹における厳冬期の剪定」である。

### 5.2.2 厳禁とする剪定

#### (1) 春の葉の展開期の剪定

落葉樹、常緑樹に限らず、若葉の展開には多くのエネルギーが必要である。もしその間に剪定を行うと、樹木は改めて不定芽を展開し、再び新しい葉を伸ばさなくてはならず、仮にこれを数度繰り返せば枯死してしまうほどである。冬期剪定の遅れは、樹体の衰弱を招くので絶対に避けなくてはならない。

#### (2) 夏期の強い剪定

本来の夏期剪定の目的である「整姿剪定」の程度を超えた強度の剪定は、樹木の栄養源である緑葉の切除であり、樹木の健康と生理を著しく損ねる。また、本来、街路樹に期待される、夏の緑陰、CO<sub>2</sub>削減、都市の冷却などの機能の発揮とも相反する行為であり、げんに慎まなくてはならない。

#### (3) 秋早い剪定

近年、秋のまだ葉の青い街路樹の枝が、ぱつさりと切り落とされる光景を目にする。その理由は、落ち葉が散らない前に、枝に着いたままの葉を一気に処分するためである。この時期の枝葉の切除は、夏の間葉に貯めた栄養分を樹体に蓄積できない上に、秋の再萌芽を余儀なくされ、不時に展開した若葉はそのまま冬を迎えずに枯死することになる。夏期剪定と同時に樹木の健康と生理を著しく損ねるばかりでなく、街路樹に求める、秋の紅葉や冬の美しい樹形への期待をまったく無視した行為である。これも絶対に行ってはならない。

#### (4) 暖地性の常緑広葉樹における厳冬期の剪定

暖地性である常緑広葉樹は、冬期も葉をつけ生命活動を続けている。そのため、特に厳冬期の剪定は、切断面が寒さに曝され、そこから枯れ込む危険性が大きい。

### 5.2.3 花木の剪定

花の観賞を目的とした街路樹は、美しい樹形と花を同時に見せることが要求されるため、葉や枝の伸長のほかに、花芽形成の時期や部位などを知っておく必要がある。街路樹として多く植えられる、サクラ類、コブシ、ハナミズキ、トチノキ、モクゲンジなどは「冬期剪定」の時期には、すでに花芽が出来ている。これらの花木に多くの花を咲かせるには、剪定を厳禁とするサクラ類を除き、花が終わった直後から1ヶ月以内の間の、翌年の花芽が形成される前に剪定し、そこから新たに伸びる枝先に花を着けるようにする。花木の冬期剪定を行う場合は、花芽を持った過密枝の「軽度な枝透かし剪定」程度に止める。なお、サルスベリは、その年に伸びる新梢に花を着けるので他の落葉樹と同様に冬期剪定が行える。

#### ■主要な花木の街路樹の剪定時期

コブシ：花の散った直後

ハナミズキ：花後1ヶ月以内

ベニバナトチノキ：花後1ヶ月以内

モクゲンジ：花後1ヶ月以内

サルスベリ：花後から翌年の3月頃までの間

## 5.3 剪定の原則

### 5.3.1 樹体を構成する用語と解説

図 5-1は樹木の骨格を構成する健全な樹木の枝の名称と解説を示したものであり、樹形の特徴や美しさはこれらの構成のバランスの良し悪しによって決まる。街路樹の剪定は、このバランスをそれぞれの樹種及び空間に応じて美しく整える技術と云ってよい。

図 5-2は樹木の生長の過程で何らかの刺激を受けたり、強度な枝葉の切除を補うために通常の枝配りの秩序とは異なる枝が出てきたりした様子を示したものである。これらの枝は一般には樹形の乱れの原因となるものとされ、剪定の際の切除の対象とされることが多い。

これらの枝のうち、特に街路樹にとって基本的に必要のない枝としては、ひこばえ、平行枝、からみ枝などであるが、徒長枝、ふところ枝、立枝、さかさ枝、胴吹き枝などは、強度な枝透かし剪定や樹形再生などの際には、それらの枝を正常な枝として仕立て直すために残しておくこともあるので、安易に全てを取り除くことのないようにする。

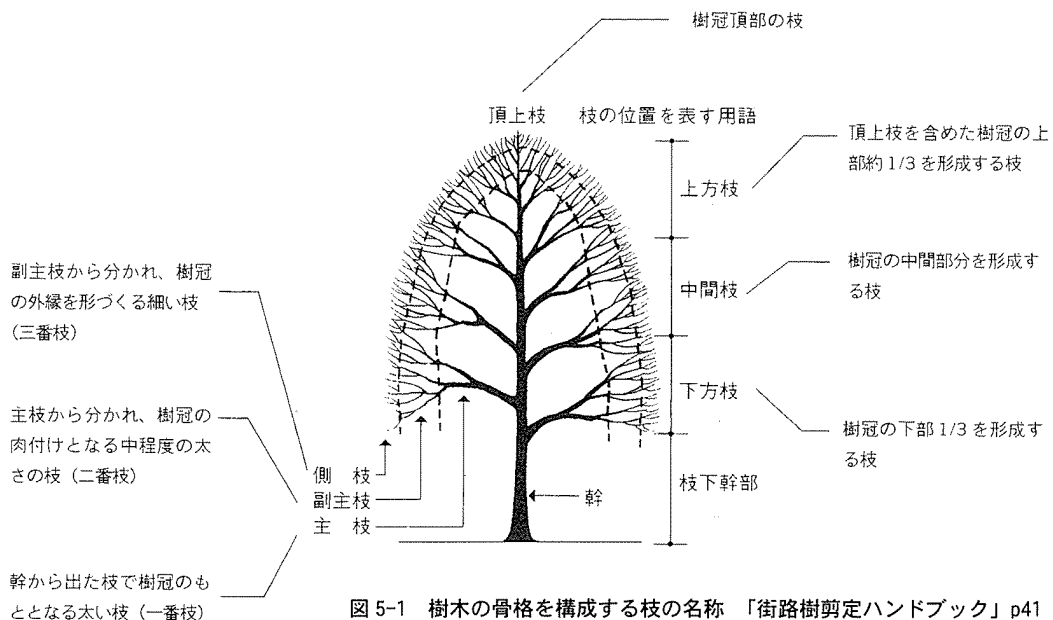


図 5-1 樹木の骨格を構成する枝の名称 「街路樹剪定ハンドブック」 p41

出典：「都市緑化ハンドブック(街路樹編)美しい街路樹をつくる 樹形のつくり直し」  
(平成30年 (一社)日本造園建設業協会)

図 5-1 樹木の骨格を構成する枝の名称

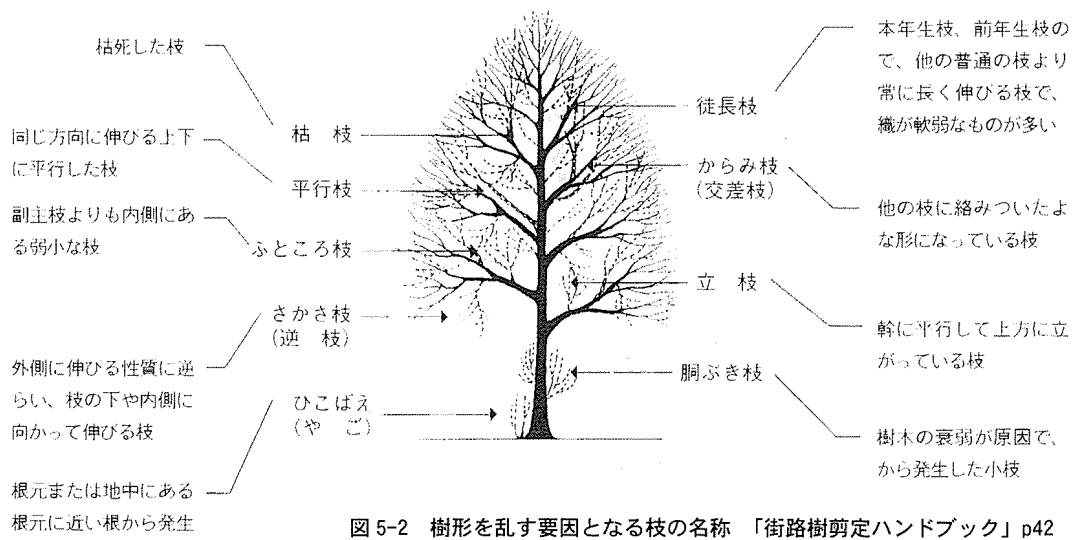


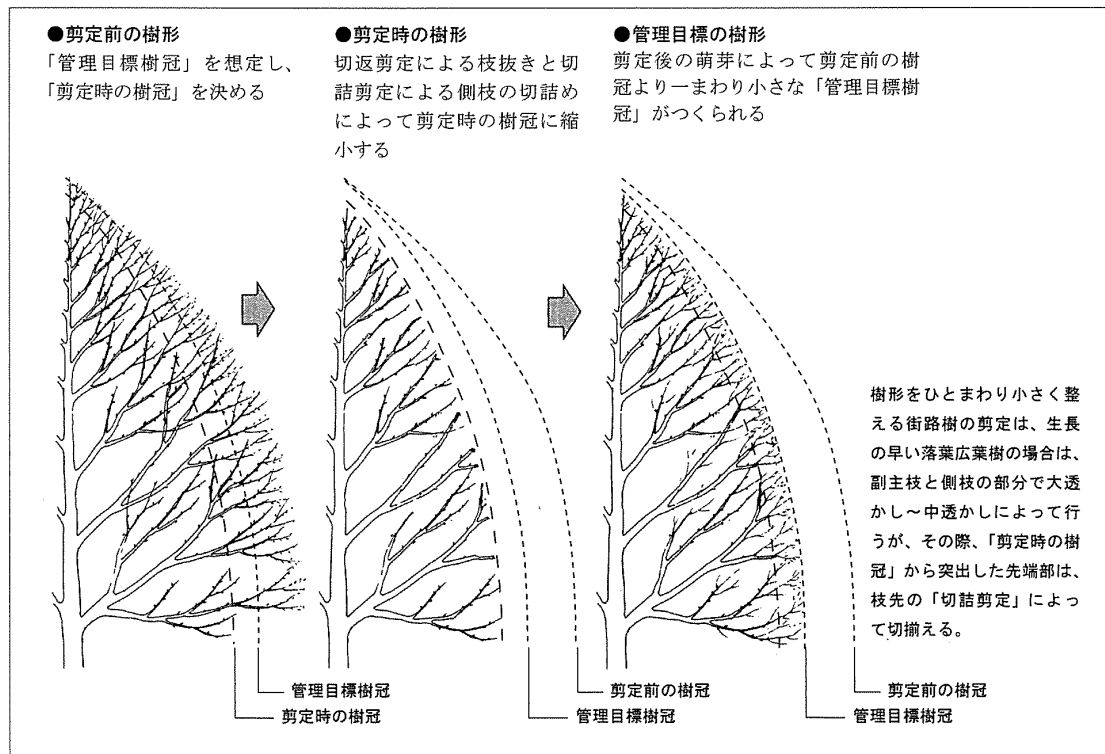
図 5-2 樹形を乱す要因となる枝の名称 「街路樹剪定ハンドブック」 p42  
 出典：「都市緑化ハンドブック(街路樹編)美しい街路樹をつくる 樹形のつくり直し」  
 (平成30年 (一社)日本造園建設業協会)

図 5-2 樹形を乱す要因となる枝の名称

### 5.3.2 剪定の手法

街路樹剪定の基本となる剪定手法は、「切返し剪定」である。

「切返し剪定」は、長い枝先を短い枝先に「切り替える」という剪定である、分枝部から枝抜きする際、残す枝よりも長い枝を切除することによって、樹冠をひとまわり小さくする目的で行なうもので、街路樹はもとより庭木の剪定の基本となる手法である。



出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
 (平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)





## 1) 枝おろし剪定

密度の高い混み枝や建築限界にかかる下枝などを「主枝を主幹の付根部分から切り取る剪定」をいう。邪魔になる下枝や枯枝の切除の際に剪定鋸などを用いて行う。

## 2) 枝透かし剪定

枝おろし剪定が大枝を幹の付け根から切り透かすのに対して、「枝透かし剪定」は、「主枝の一部」や「副主枝」あるいは「側枝」を分枝部分から切り透かす剪定をいう。その際、主枝の一部から先を大きく切り透かす剪定を「大透かし」、副主枝から先を切り透かすのを「中透かし」、側枝のみを切り透かすのを「小透かし」という。

街路樹の剪定は一般に、「中透かし」と「小透かし」の組合せで行われる。

### (a) 大透かし

樹形の骨格を形成している主枝の一部を間引く剪定で、太い枝（主枝）を枝の分岐部から粗く切り透かす。

### (b) 中透かし

枝の中間部分を構成する副主枝の一部を間引く剪定で、副主枝の分岐部から切り透かす。

### (c) 小透かし

樹冠を構成する枝先の側枝の一部を間引く剪定で、伸びすぎた側枝を切り透かす。

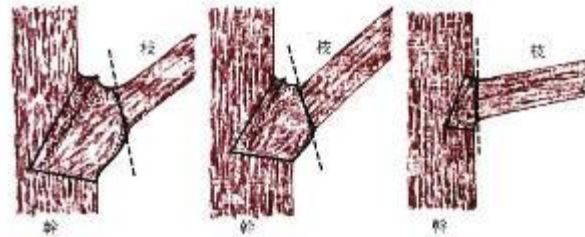
### a) 適切な切断位置

枝の付け根の枝組織と幹組織が混じり合っているブランチカラーと呼ばれる部分を傷つせず、ブランチカラーに近い枝の組織を図 5-5のような位置で切断する。その際幹の付根から幹に接して切る「フラッシュカット」を行なうと、切り口をふさぐ防御組織が破壊され、腐朽菌の侵入を容易にしてしまうので、剪定の位置と角度を慎重に決めて切除する。（図 5-7参照）

※枝が太い（人の腕よりも太い）場合、またサクラなど腐朽しやすい樹種については切り口から腐朽菌が入るリスクが大きいため、「フラッシュカット」は適さない。むしろ、「スタブカット」にしたほうが良い場合もある。



イイギリの「枝の襟(ブランチカラー)」



線で囲まれた部分が「枝の襟(ブランチカラー)」で、ここを傷つけずに点線部分から「二段切り」により枝おろしする。「襟」の部分は、樹種によってはほとんど目立たないものもあるが、枝の付け根の広がり具合でおよその検討を付ける

出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

### 図 5-5 枝おろしの適切な切断位置

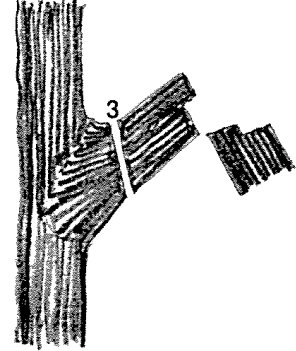
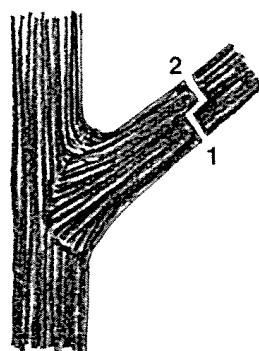
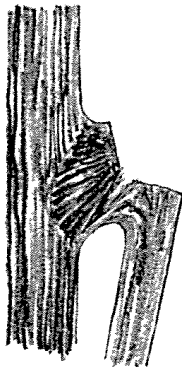
#### b) 切り口の裂けの回避

大枝を一回で切り取ろうとすると、枝の重さで幹の付け根の下方部が裂けてしまう。これを避けるには、枝を切断位置の上部で一旦短く切り詰めて枝を軽くし、その後に適切な切断位置で切り戻す「二段切り」を励行する。

一度の大枝を切ると、枝の重さでつけ根から裂ける

1に切り込みを入れて枝の裂けを防ぎ、2にノコギリを入れ、枝先を切り落とす

「枝の襟(ブランチカラー)」を傷つけない位置3で軽くなった残りの枝を切り落とす

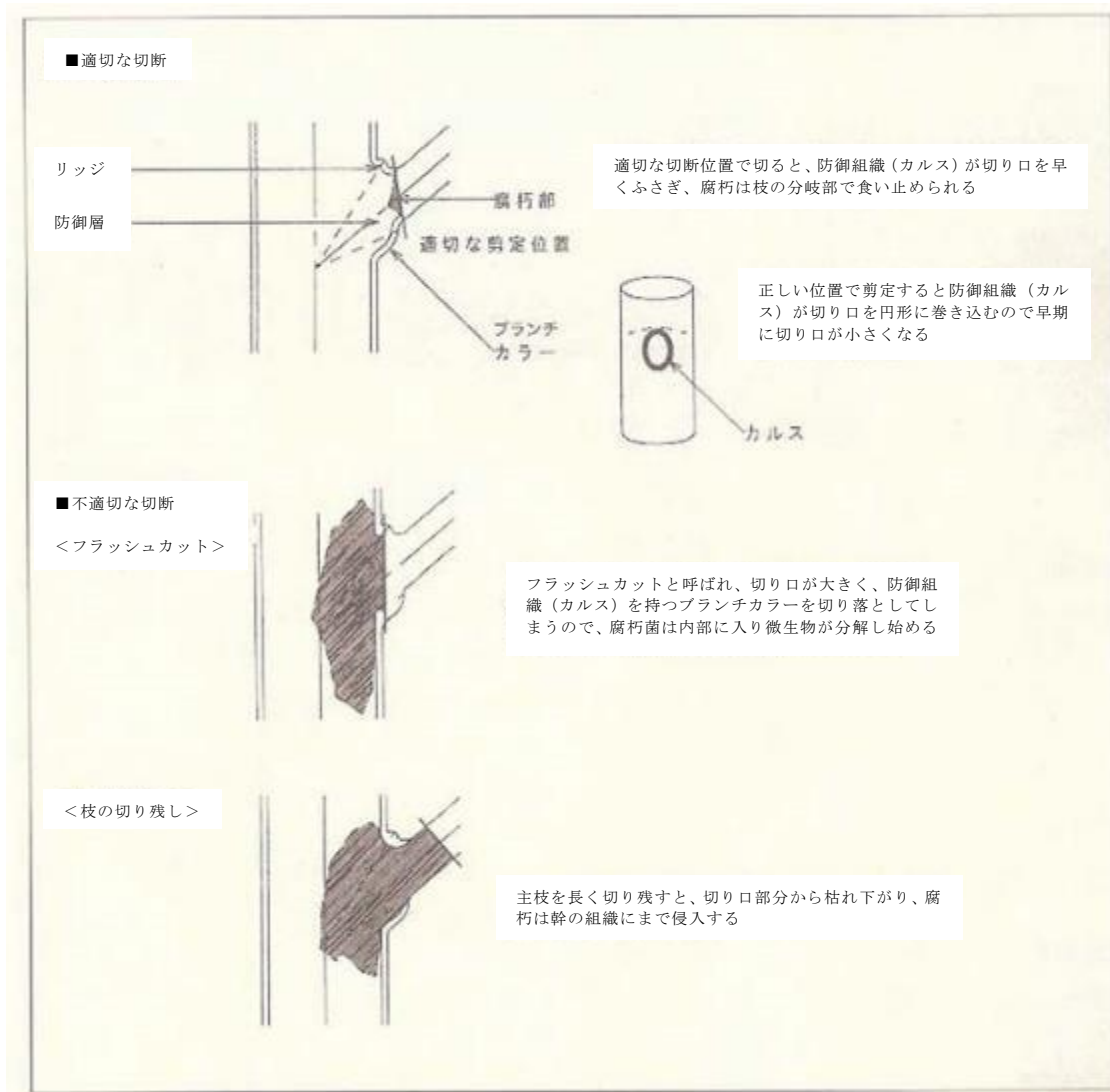


出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

### 図 5-6 「二段切り」による切り口の裂けの回避

## カルス

植物は、傷害により一部の細胞が破壊されると、他の細胞の生長や増殖を促すと考えられるホルモンが分泌される。このホルモンが、傷口からの雑菌類の感染や侵入を防ぐかのように作用し、一種の保護組織をつくる。これがカルスまたは癒傷組織といわれるものである。



出典：不明

図 5-7 切断位置の良否

## (2) 切詰剪定

「枝透かし剪定」が主枝・副主枝・側枝の構成を崩さずに剪定するのに対し、「切詰剪定」は、枝の途中で切除して短く詰め、そこから萌芽する新たな枝によって、枝張りを再構成する目的で行う。

切断する部位は、通常の街路樹剪定では、副主枝と側枝が主な対象となるが、樹形全体を極端に縮小して、「樹形再生」をするような場合は、主枝や時によって幹に及ぶこともある。

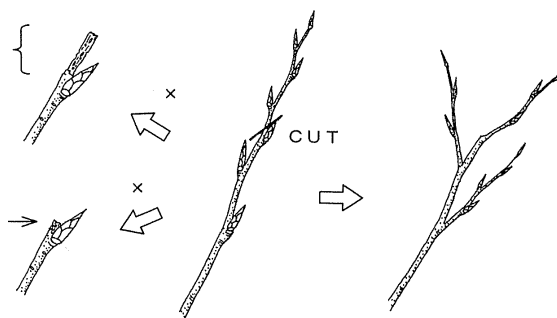
### 「切詰剪定」の要点

- ・切詰剪定は、切返し剪定では縮小しきれない場合に、次善の手段として行う。
- ・切る部位が側枝から副主枝、主枝にいくに従い、切除直後の樹形は管理目標樹形から隔たり、その再生に時間がかかる。
- ・側枝の先端を刈込鋏で切り揃える「刈込剪定」も切詰剪定の一種である。
- ・本年生枝や前年生枝の若い枝で、定芽のはっきりしている枝を切り詰める際には、新たな枝を伸ばしたい方向の定芽の直上部で斜めに切除する。その際、芽より先に枝を多く残すとごつごつした感じなり、またその部分が枯れ下がってくる。同様に、垂直に切った場合も芽の反対側の角が枯れ込んでくる。
- ・副主枝より太い枝には一般に定芽はない。そのため、再生する枝のバランスに合わせた位置で適宜に切り詰める。その際も切り口を内側に向けた斜めに切り、“ぶつ切り”の印象を与えないようにする。新しい萌芽は、切り口周辺にある不定芽から不規則に伸びてくるため、必ず翌年には伸ばしたい方向の枝を残して他の枝を整理する管理を行う。
- ・枝先の瘤を完全に取り除き、新たに萌芽した枝で副主枝と側枝を再構成するような場合には、瘤の直下で切除し、同様に不定芽からの萌芽枝を整理する管理を行う。
- ・切り詰める枝の対象が主枝や幹に及ぶ場合は、植木用等の防腐剤の塗布を原則とする。

### ■定芽がある若い枝の場合

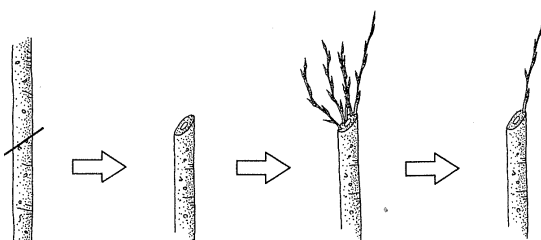
芽から離れたところで切ると枯れ下がる

垂直に切ると芽と反対側の角が枯れ込む



### ■定芽のない古い枝の場合

斜めに切る



将来伸ばす枝を決めて新生枝を整理する

※1：前年生枝にある年

※2：2年以上経過した定芽のない枝をぶつ切りにした時などに、普通では芽がでない箇所から出る芽

出典：「大型街路樹の維持管理手法に関する共同研究報告書（第2分冊）街路樹剪定の手引き」（平成11年 建設省土木研究所環境部緑化生態研究室・社団法人日本造園建設業協会）

### 5.3.3 枝葉のバランスを保つ剪定

樹木は一般的に下方部より陽光を十分に受ける頂上部の方の生長が旺盛になり、生長するにしたがって上方部の枝葉の密度が高くなっていく。逆に下方部は上枝の陰になり、勢力が次第に衰弱し、下枝は枯れ上がってくる。この傾向は陽樹ほど著しい。このような性質を「頂部優性」という。

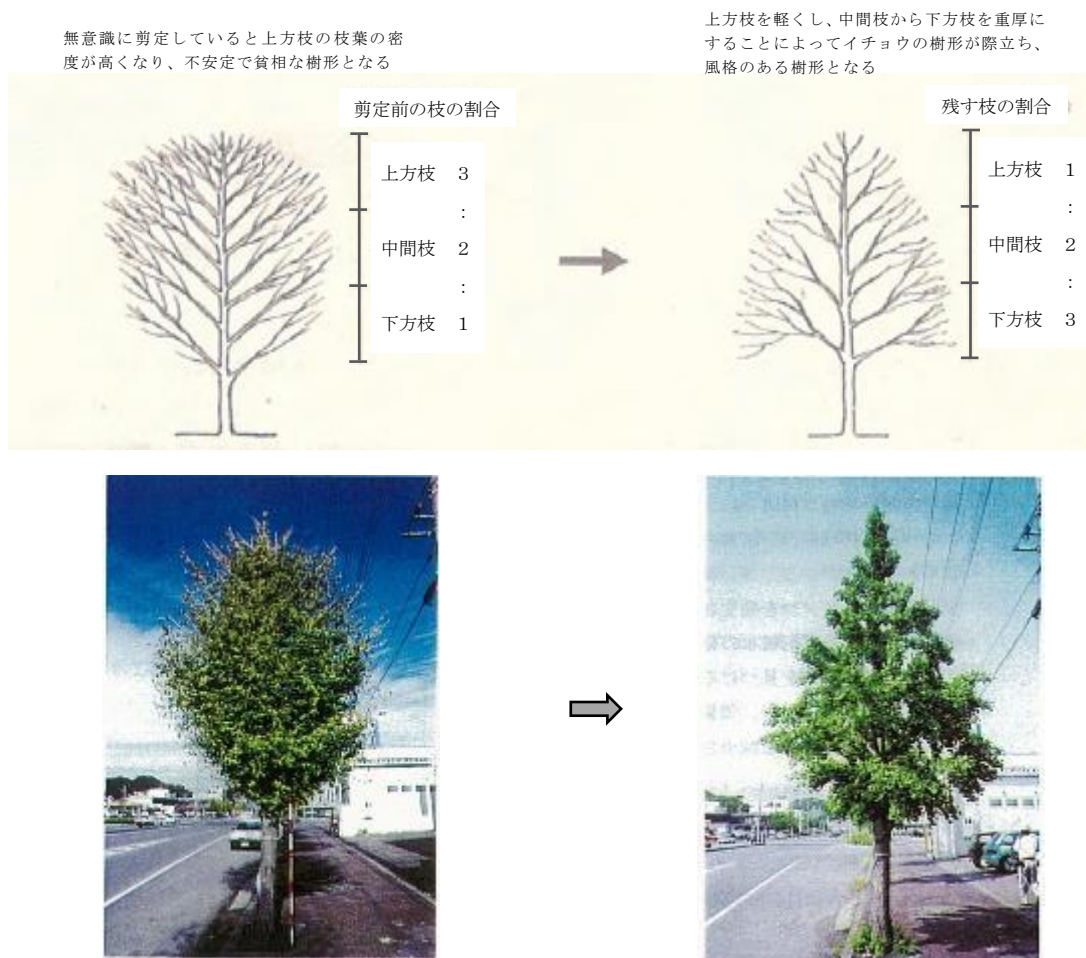
樹体全体の枝葉の均整を大切にする街路樹の剪定は、優性な頂部の枝葉を間引き、下方の枝葉を永く健全に保つことが要点である。

したがって、頂部優性傾向にある現況樹木に対する剪定時の樹形は、頂部をより強く剪定し、樹形全体の枝葉のバランスを考えた管理目標樹形に誘導していく。

その際の枝葉密度のバランスは、樹冠を大きく三区分した上方枝、中間枝、下方枝でそれぞれ残す枝の割合の目安を1 : 2 : 3とする。

図 5-8は、円錐樹形のイチョウの事例であるが、それぞれの樹種の特徴を活かして同様の考え方で剪定を行う。

上方の枝葉の密度を低く、下方に十分な緑量を残すことによって、重心が下方にある風格のある樹形となるばかりでなく、上方部への風圧を受けにくいことから風倒の危険性の軽減の面からも有効である。



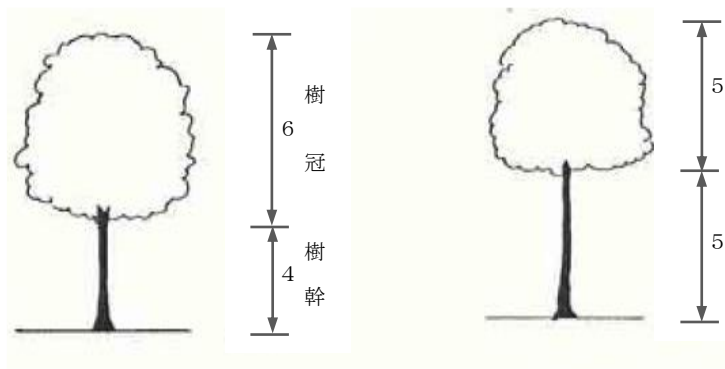
出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

図 5-8 イチョウの枝葉密度の調整による樹形づくり

### 5.3.4 樹幹と樹冠

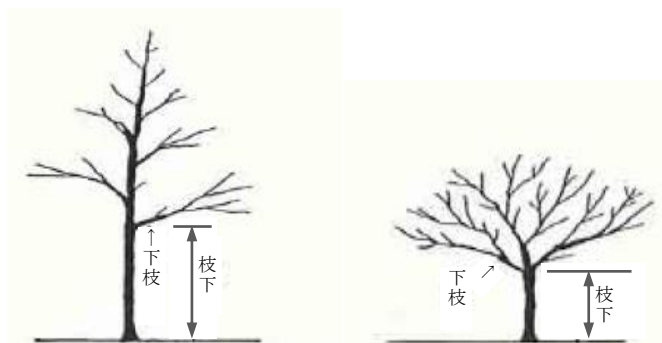
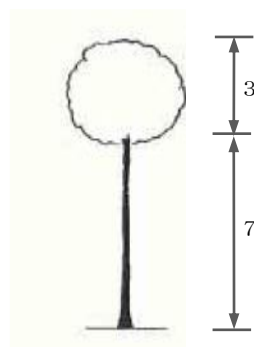
常緑樹にあっては、いつも樹冠は葉でおおわれているので欠枝部がなく、整った自然の樹冠を保つように維持されて行けばよい。いずれにしても、自然の美しく整った樹形を保つためには、樹幹と樹冠部との調和が大切で、樹冠を作る最下部の枝は、歩道では歩行者に支障を来さないよう、また車道側でのバスや大型車の走行にも障害を与えぬことなどを考えると、少なくとも地上3メートルぐらいからの分枝が望ましく、樹高7メートル程度とすれば、3メートルぐらいから下枝のあることが、樹形の美しさを出すうえからも、大切なポイントとされてくる。樹高をこれ以上とすることができる場所では、それ以上からの下枝の位置でもよいことになる。

このように、自然の美しい樹形を保つためには、下枝が枯れ上がって、樹冠が上部に少ししかないものとなると、樹形そのものの美しさは失われるし、街路樹の使命である緑量、そして、夏期の緑陰効果も少なくなるので、樹幹と樹冠との関係は非常に大切なこととなる。(図 5-9参照)



樹冠と樹幹の比率

樹冠	樹幹	樹形
6	4	良
5	5	やや良
3	7	不良



出典：不明

図 5-9 樹形＝樹冠と樹幹



### 5.3.5 樹形の縮小

大きくなり過ぎた木を小さくする場合、自然の整った樹形を基調とした樹形を保てるようにするためには、単に頂部を切り取って目的の樹高にするとか、枝の支障部を切り詰めるのではなく、自然の整った樹形を相似形に縮小する心構えで行わなければならない。

#### (1) 広樹形のもの

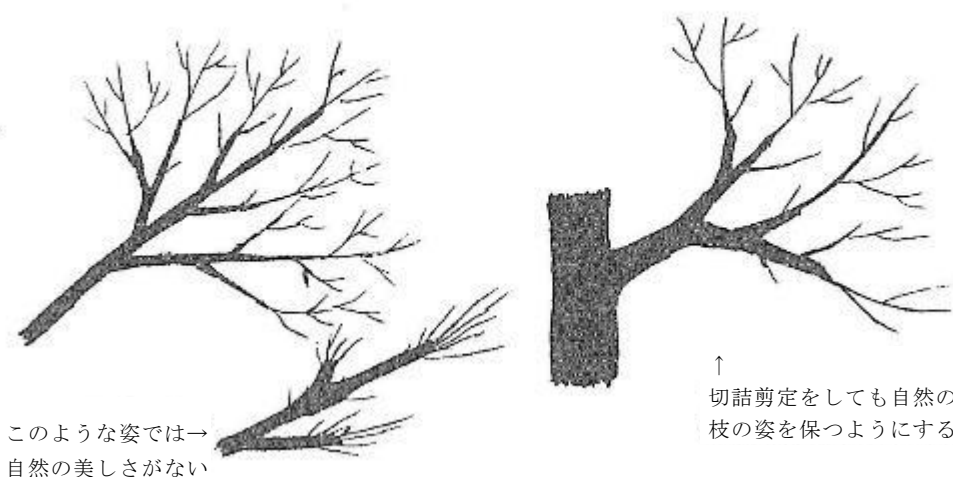
ケヤキ、トチ、サクラ、エンジュなどでは縮小の目途を定めて、四方に広がる主枝などからの分枝（先端は前年生枝がある）が、目途の大きさに都合のよいところにあるものを探して、短い方と切り替える。

丁度よいところに短い分枝がない場合には、その下方のもの、または上方のものなら、その先端部で、また短い枝と切り替えて、相似形に縮小を計る。決して古枝部でブツ切の切り詰めはしないこと。（図 5-11(1)参照）

#### (2) 狭樹形のもの

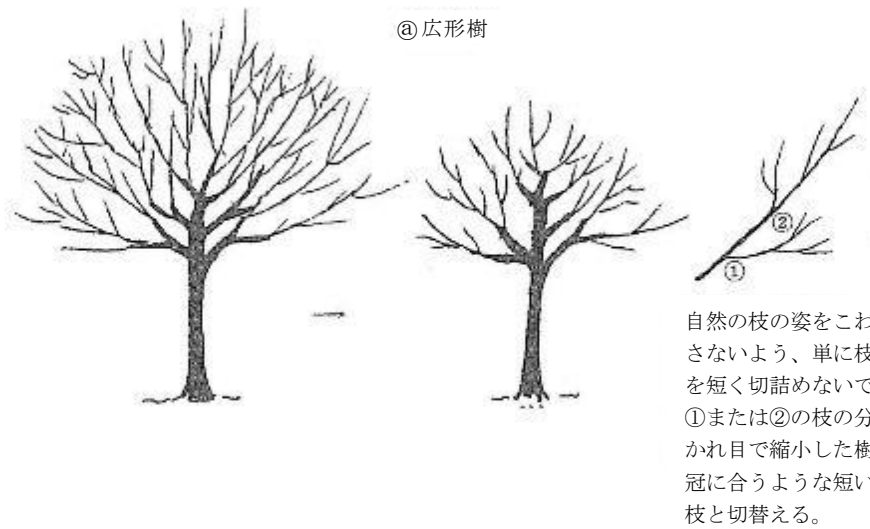
スズカケ、ユリノキ、トウカエデなどは、主枝が上部まであるが、目途縮小の高さが、最上主枝の下方位からにしたい場合は、幹部から発生した直立性の前年生枝を探して、その直上部で幹を斜め上向きの切り口にして切り替える。

切り口が大きい場合は、ペンキ又はトタンなどで保護し、残した直立性の前年生枝はしっかりした上向きの定芽部で切り詰め、新しく定めた高さに応じて、上方部の主枝の部分からやや水平に出ている前年生枝と切り替えて切り取る。中間、下方枝に至るまで次第に分枝多く、枝幅は長くそれぞれ先端は前年生枝で止るようにして、高さに応じた枝幅の縮小も自然の枝、樹形を崩さないように整える。（図 5-11(2)参照）



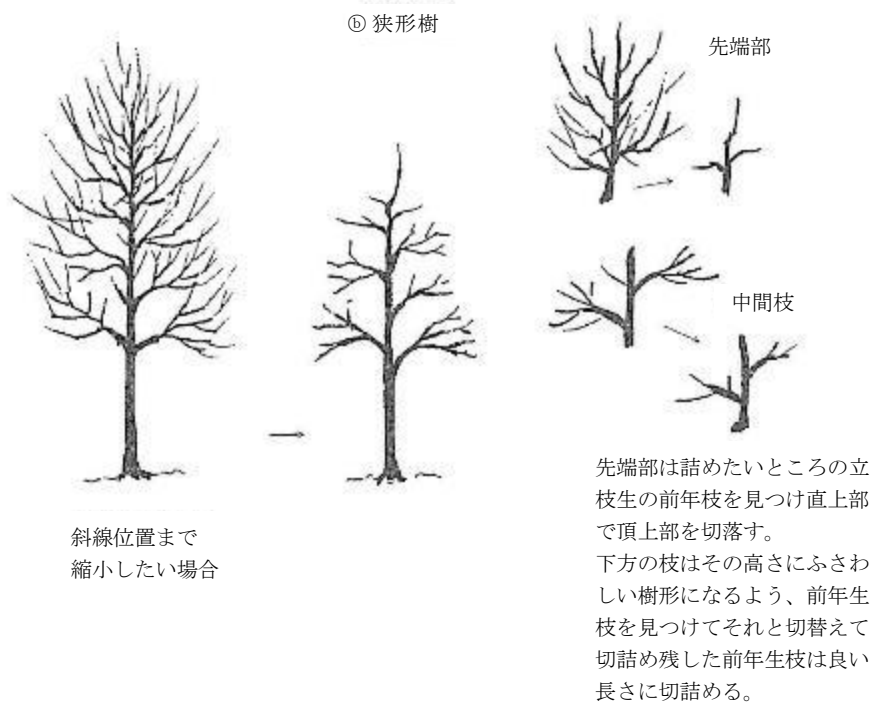
出典：「街路樹の剪定」（1985年 藤田昇）

図 5-10 自然の枝の姿



出典：「街路樹の剪定」（1985年 藤田昇）

図 5-11 (1) 樹形の縮小の場合 (1)



出典：「街路樹の剪定」（1985年 藤田昇）

図 5-11 (2) 樹形の縮小の場合 (2)



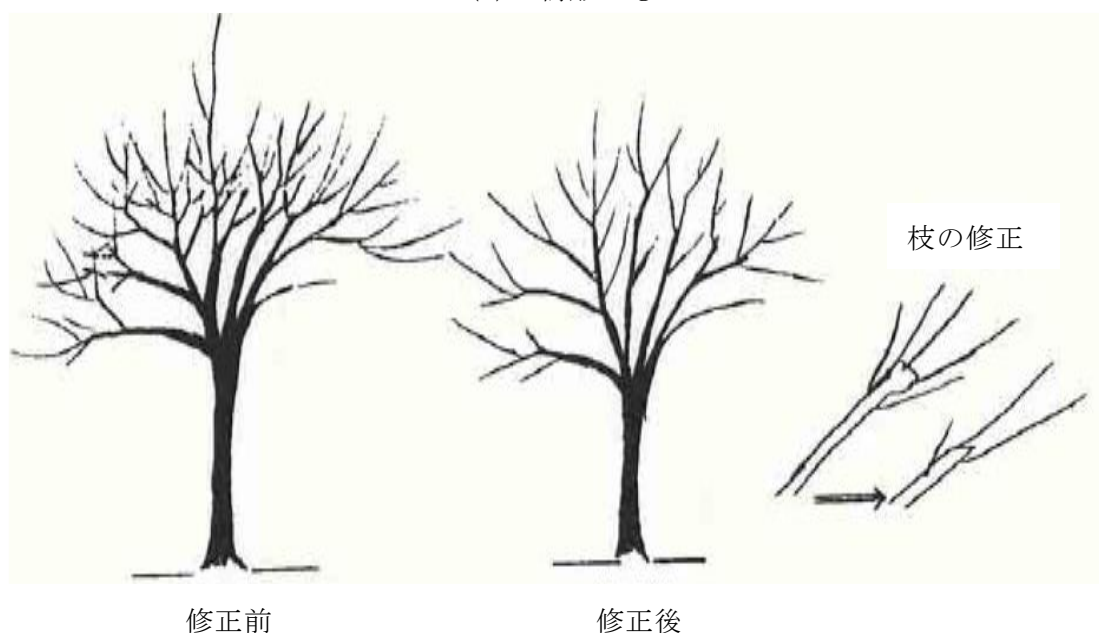
### 5.3.6 不整形樹の修正

#### (1) 広樹形

幹の上端部から主枝が枝分かれして、樹形が造られている広樹形のケヤキ、サクラ、エンジュ、トチなどでは、剪定の手入れの回数も少なく、自然の枝の伸びにまかせているためか、樹形全体としては、見苦しいほど不整になったものは比較的少ないが、エンジュなどでは自然の枝抜き、切り替えによって自然の枝が保たれるべきものを、枝を切り詰めた痕跡が目立ち、また均等な枝の配置でなくなったものなども多い。

これらは以前に切り詰めてコブになった部分から、出ている自然の枝の姿を保てる方向の若枝と、コブの下部から切り替えるか、またはコブを削り取るように、その先端に伸びる枝を残して、自然に見られる枝とし、欠枝部はその方向に出ている小さい枝だけでも残して、自然の枝として伸ばし、樹冠の枝を均等な配置にするよう修正していく。

(A) 広樹形のもの



出典：不明

図 5-12 不整形樹の修正 (1)

## (2) 狭樹形

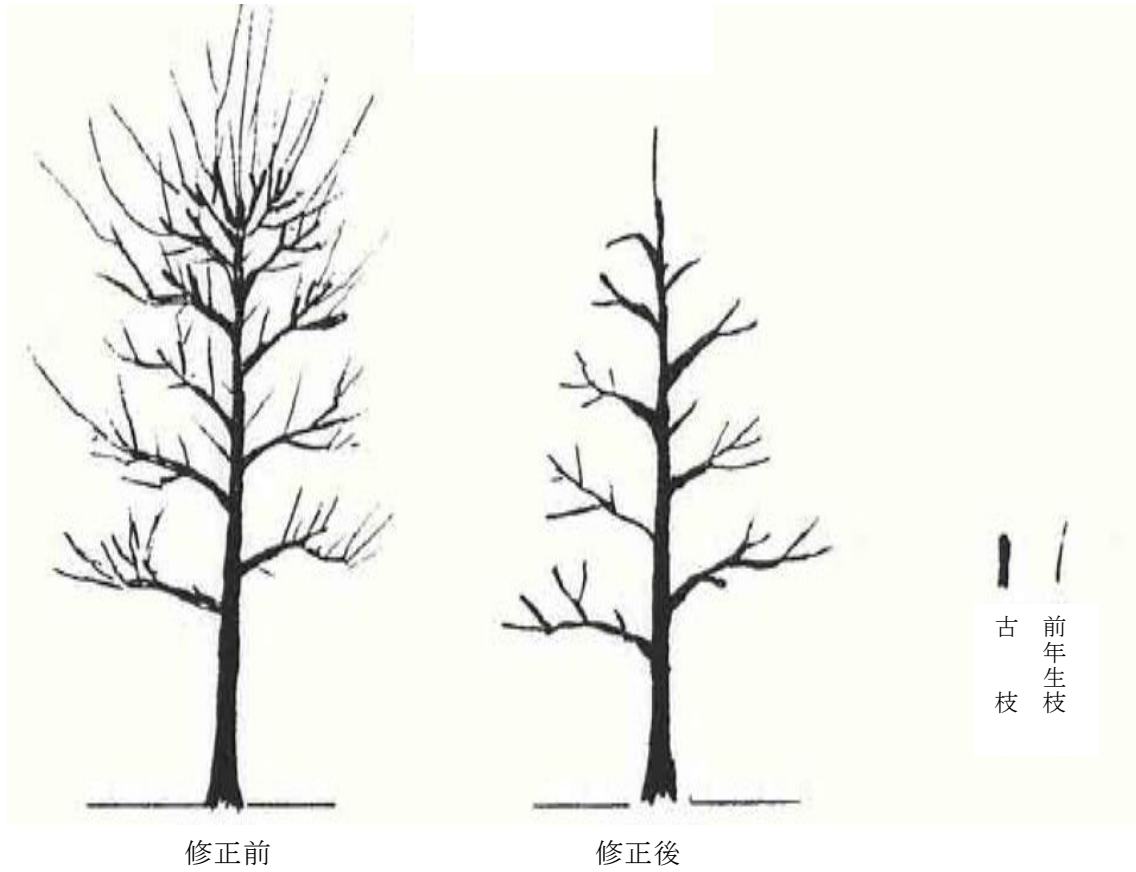
幹が1本で頂上まで通り、幹から主枝が均等に四方に配置されるような、いわば狭樹形に仕立てられているスズカケノキ、ユリノキ、トウカエデ、ヤナギなどは、いずれもこれまで縮小された姿を保つための剪定が繰り返されているうちに、上部枝の枝分かれが多く、自然の樹勢に従って、この部分の枝が太く、最下位の主枝が細く小さくなっているものを多く見受ける。また、剪定された主枝には、発生した多数の小枝を短く切り取った跡が残っており、落葉時の冬の樹形としては、見ばえが良いとはいえないものが多い。

このような枝の姿の木でも、夏期に枝葉が繁茂したときには、それなりの樹形となるので、差し支えないといえそれまでだが、こうした生育を続けていると、下枝は枯れ上がって、高さを一定に保つものとしては樹冠部が少なく、整った美しい自然樹形の姿は崩れ、そのうえ緑量の減少にもつながってくる。

このような樹の一般的な修正としては、頂上枝の分枝を減らし、可能であれば幹先端は1本の前年生枝とし、そのすぐ下の主枝は1本となるように修正するが、一時にやると、整った樹形が保ちにくくなる。頂上部に古枝でいくつにも分かれた枝のうち、その下枝と重なっているもの、樹形上必要ない枝はその基部から切り取るようにし、幹の頂端となる部分——比較的垂直に立っているものは残して、その先端の前年生枝の定芽の上向きの位置で切り詰めるか、それでも幹を頂上1本にすることができない場合は、広がって出た主枝を、きわめて短く切り詰める。

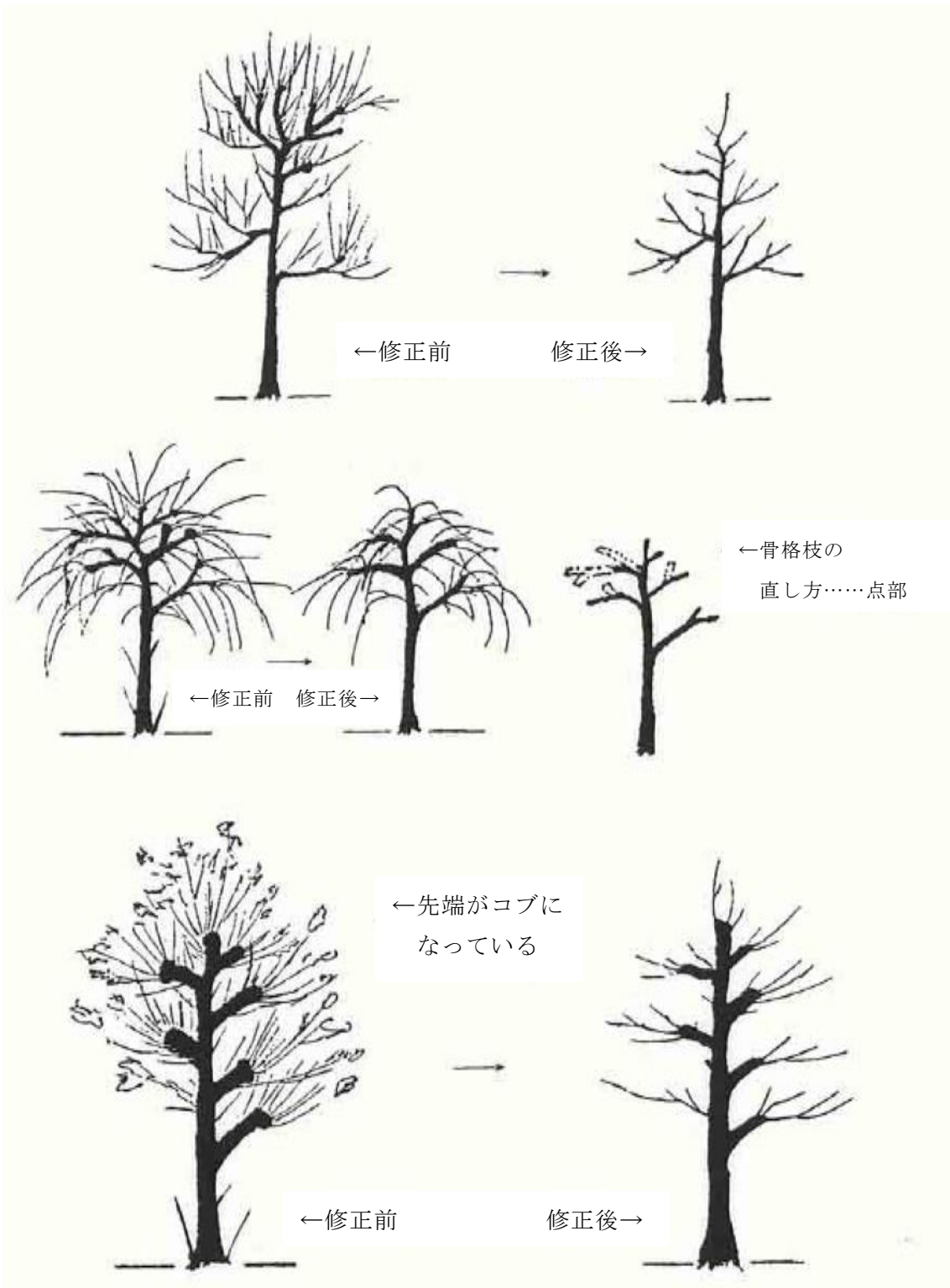
不定芽の発生を促し、翌年垂直に伸びた枝1本は、その上向きの定芽で切り詰め、多数出た枝の大部分は、基部を残さずに切り詰め、主枝として残して良い部分から水平に、また斜め上向きの枝は、上部から30～40センチ置きに1本、幹を中心に四方に均等に残すようにして、頂上部の修正の枝作りをする（図 5-13、図 5-14参照）。

(B) 狭樹形のもの



出典：不明

図 5-13 不整形樹の修正(2)



狭樹形のもの

出典：不明

図 5-14 不整樹形の修正剪定の例

### 5.3.7 コブのついた樹木の剪定

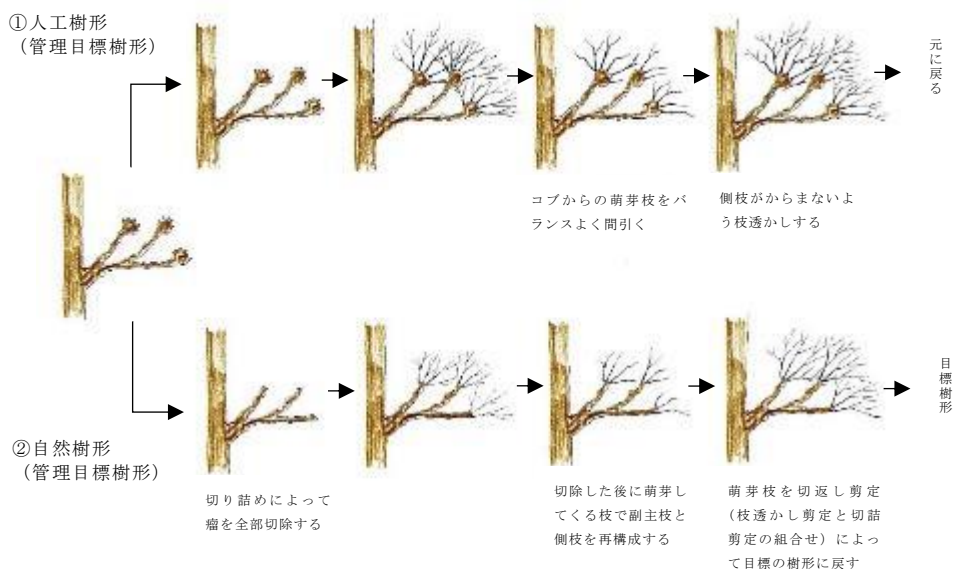
くり返し同じ位置で「切詰剪定」を行うことによって枝先に出来る剪定コブは、人為によってつくられる人工樹形である。サルスベリやアメリカデイゴなどはこのコブを意図的に残して人工的な庭木として観賞することも多い。

しかし、自然樹形を管理目標樹形とする街路樹の場合は、初期の段階から「切返し剪定」を励行して剪定コブをつくらないことが基本である。また、既に剪定コブが出来上がってしまっている街路樹については、剪定コブのついてる枝の太さやコブの大きさなどから判断して、以下のいずれかに管理目標樹形を定める。



剪定コブを造形的に残した人工樹形のプラタナス  
ドイツ・フランクフルト/写真・目黒 明美  
出典：「街路樹剪定ハンドブック  
—美しい街路樹づくりに向けて—」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

- ①剪定コブを残して「人工樹形」として維持する：コブの付け根の枝の太さが腕よりも太い場合は、切り口から腐朽が入りやすいので、コブのままに維持するのが安全。
- ②剪定コブを切除して樹形再生によって「自然樹形」に戻す：コブの付け根の太さが腕よりも細い場合は自然樹形への樹形再生も可能。



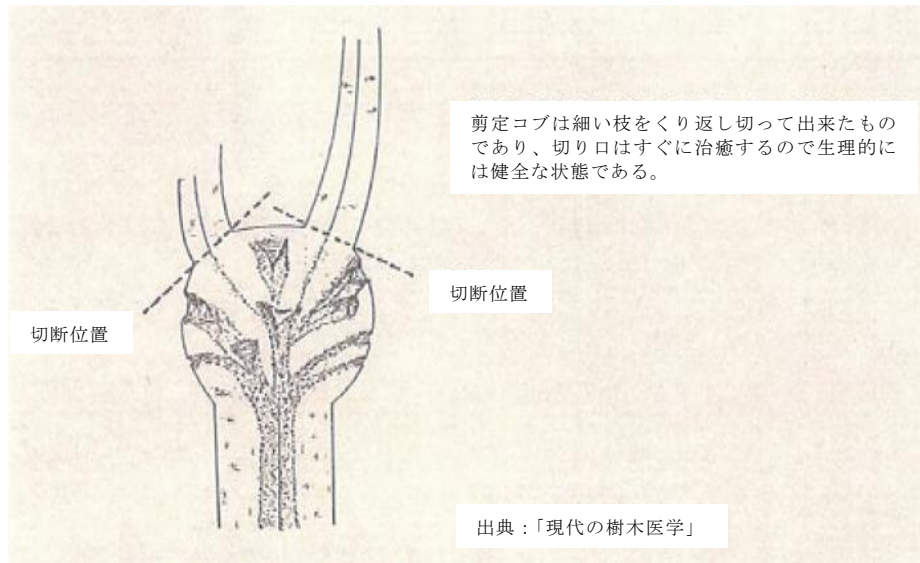
出典：「街路樹剪定ハンドブック—美しい街路樹づくりに向けて—」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

図 5-15 剪定コブの処置

## ■判断の要点

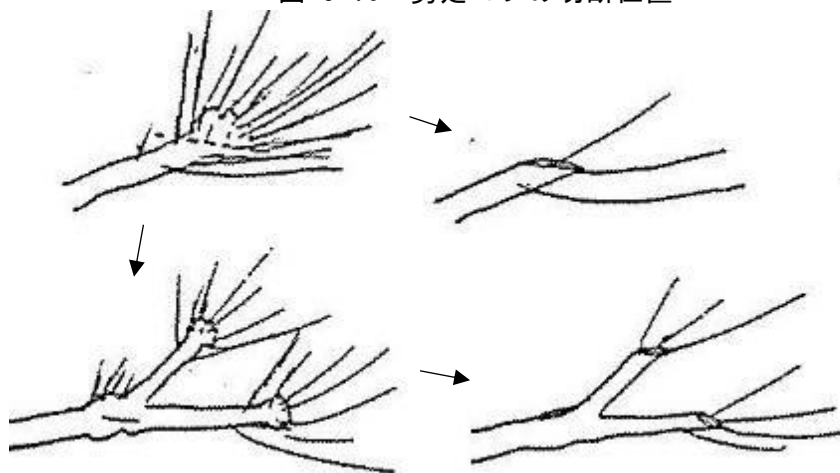
剪定コブは、はじめに切除した枝をカルスが覆い、そこから萌芽した枝をつけ根からくり返し切り詰めることによって、さらに萌芽枝のカルスが発達して肥大化したものである。ゴツゴツしたコブまわりは、枝葉がたまったり、虫の棲処となったりすることはあるが、コブそのものは生理的には健康的な状態なのである。

そのため、太い枝を切り詰めてコブを取り除く「樹形再生」を選択する場合は、生理的なリスクが大きいので、極めて慎重に事前の調査を行うことが重要である。特にコブそのものの切断は、「木部」の切り口の断面が大きくなるばかりでなく、癒合組織を破壊するので絶対に行わない。(図 5-16参照)。



出典：「Modern arboriculture」(1996年 日本樹木医会)

図 5-16 剪定コブの切断位置



出典：「街路樹の剪定」(1985年 藤田昇)

図 5-17 枝(コブ)の直し方

### 5.3.8 常緑街路樹の剪定

#### (1) 樹形

常緑樹の樹形は、常に葉に包まれているので、枝の姿は見え、外見的に自然に整った姿なら見苦しいことはないので、剪定維持はその街路の景観にふさわしい樹形維持に努めて、伸び過ぎた枝を切詰めて行けばよいとの安易な考え方も生じ易いが、枝蒸れによる枝枯れ、頂部優性による下方枝の衰弱など考え合わせて、常に活力ある生長と生氣ある緑を保てるような剪定の配慮を忘れてはならない。

#### (2) 剪定の時期

常緑樹は比較的暖地型なので、生育のサイクルを合理的に利用するにしても、枝を多く切る基本的な樹形作りは、暖かくなって来て各樹種共新芽が膨み始めた頃、すなわち東京を標準とした場合は4月上・中旬頃がよい。

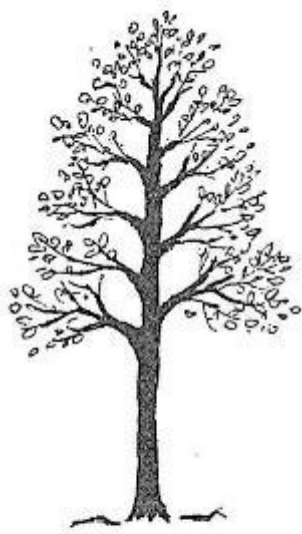
一方で新梢が伸びて成葉となり、生長が止まる7月頃から9月にかけては、多くの枝葉を切らない方がよく、樹勢を貯えて健康的な生育を維持するためにも伸び過ぎた枝を軽く切り詰め、多少枝を間引く程度にとどめたい。この時期に枝の切り詰めなどが多いと、再萌芽した若枝は、冬までに充実した親枝になれないものが多く、寒害を受けて枯れ込む原因にもなる。

また、10～11月には生理的には基本剪定のような剪定をしてもよい時期ともなるが、関東など寒地では、ほどなく降霜・寒風期となるので、わずかに残された枝葉が傷まないよう、11月以後の強い剪定は慎む方がよい。

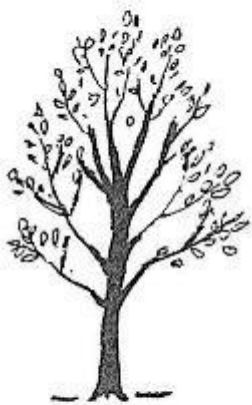
樹形を縮めるためや、はびこり過ぎた枝を古枝部で切詰めても萌芽性は高いのでよいが、秋から冬期に行くと枯れ込む可能性が高いので絶対に避けるべきである。止むを得ない場合は、その部分にコモなどを巻いて保護する必要がある。

太枝での切詰は芽が膨み始める時期がよく、切詰先端部から多数の小枝の発生があるが、翌年良い枝となるもの1～2本を残して切り替える。





↑各樹種の標準樹形



↑山取モノ樹形

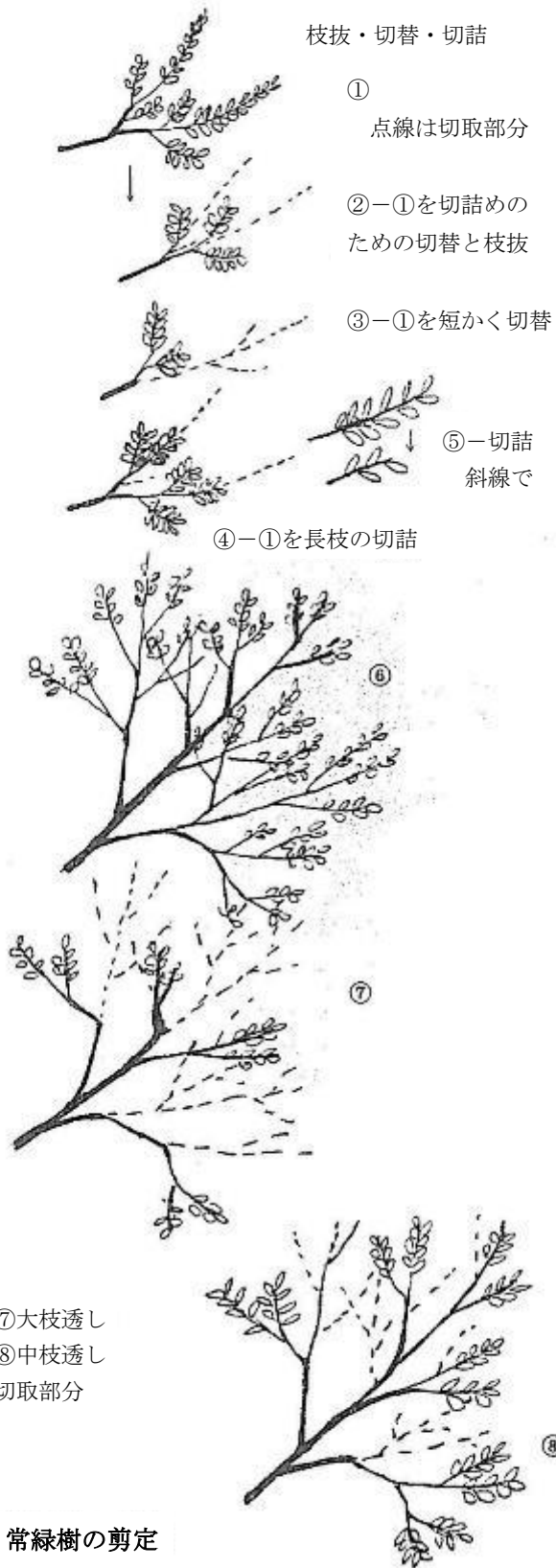


図-15 常緑樹の剪定

出典：「街路樹の剪定」（1985年 藤田昇）

図 5-18 常緑樹の剪定



### (3) 樹形と剪定

老木となった場合は普通広樹形型ともなるが、一般に街路樹として道路景観の快適な利用のためには、以下のように維持していくことが望ましい。

- ・狭樹形タイプ
- ・幹は頂上まで通って、幹を中心として幹から主枝が螺旋状に下方から上方まで均等に配置されている
- ・上方部の主枝は比較的分枝が少なく、下方枝になるにつれ分枝多い
- ・各枝の先端部は葉を付けた前(本)年生枝で外観的に欠枝部がない
- ・自然の枝や葉でおおわれた、樹種により多少の違はあるが整った卵円または広卵円の樹冠
- ・樹冠と樹幹の比は少なくとも5 : 5位

実生育成のマテバシイ、ヤマモモなどは以上のような骨格枝の姿になったものが多いが、山取育成のクスなどでは育成の過程で幹を4メートル位で切り詰めて作られたものなど、頂上部に枝が多く、下方枝が少ないのが普通である。この場合でも、頂部優性にならないよう、頂上部の主枝はその付け根から切取って2～3本として、主枝も短くなるようにして、下方枝は少ないが、少ない小枝を育てて、下方の主枝として分枝も多く一定の枝幅が出せるように剪定維持していく。

樹種、生育の程度により極めて複雑だが、幹からの主枝は、均等に配置され、それ以外の枝はその付け根から切り取り、主枝から副主枝先端の葉を付けた分枝は混み過ぎないように間引き、長いものは若枝部で下方の葉の上部から切り詰め、または短い方の分枝と切り替えなどにより樹冠が整い、枝葉間が適度に隙間あるように剪定するのが理想的である。

なお樹種によっては生育期になって外面の枝葉が混み過ぎない程度に幹などからの萌芽枝の多いもの(ヤマモモ、ウバメガシなど)は、樹形を保てるよう、つけ根から切り取り、長く伸び出す徒長枝も多くの場合その付け根から、古枝、地際から出る立枝性のものも切り取る。

街路樹では、場合によっては大枝で透すこともあるが、中枝で透す中透しの程度の剪定で行うのがよいだろう。



## **6. 強い切詰剪定(強剪定)による 樹形の作り直し**



## 6. 強い切詰剪定（強剪定）による樹形の作り直し

### 6.1 強剪定とは

「強剪定」とは、主枝及び主枝に準じるような太い枝を短く切り詰めたり、多くの枝や芽を切り落としたりするような比較的規模の大きな剪定のことをいい、「強い剪定」ともいう。強剪定は、乱れた樹形を“大手術”によって再生し、主枝を作り直して自然樹形を取り戻すことが可能である一方、切り口が大きくなるため樹体への負担が大きく、樹勢衰退につながるリスクもある。また、強剪定をすると直後の樹形は小さくなるが、その後に切り口付近から生長してくる枝は徒長枝<sup>とちようし</sup>が出やすくなり、混み合いやすくなるため、樹形を乱す原因ともなる。

これに対し、「整枝剪定<sup>せいし</sup>」とは、樹木の自然に備わった樹形を基本的に残しながら樹枝の骨格・配置をつくるために行う剪定をいう。整枝剪定は樹体への負担が比較的少なく、その後も枝が穏やかに伸びるため、樹形が崩れるリスクも小さくなる。

表 6-1 剪定の強さの違いによる樹形と樹体への影響（イチヨウの例）

剪定の強さ	弱	中	強
樹形の例			
剪定頻度	低	中	低
剪定する枝葉量	少ない／細い枝	中／中	多い／太い枝
樹体への影響	小さい	中	大きい
	特になし	ひこばえの大量発生（樹勢の低下） 	枯枝や腐朽の発生 

「国土技術政策総合研究所資料 No. 1059 街路樹の倒伏対策の手引き 第2版」（2019年 国土交通省 国土技術政策総合研究所）を参考に作成

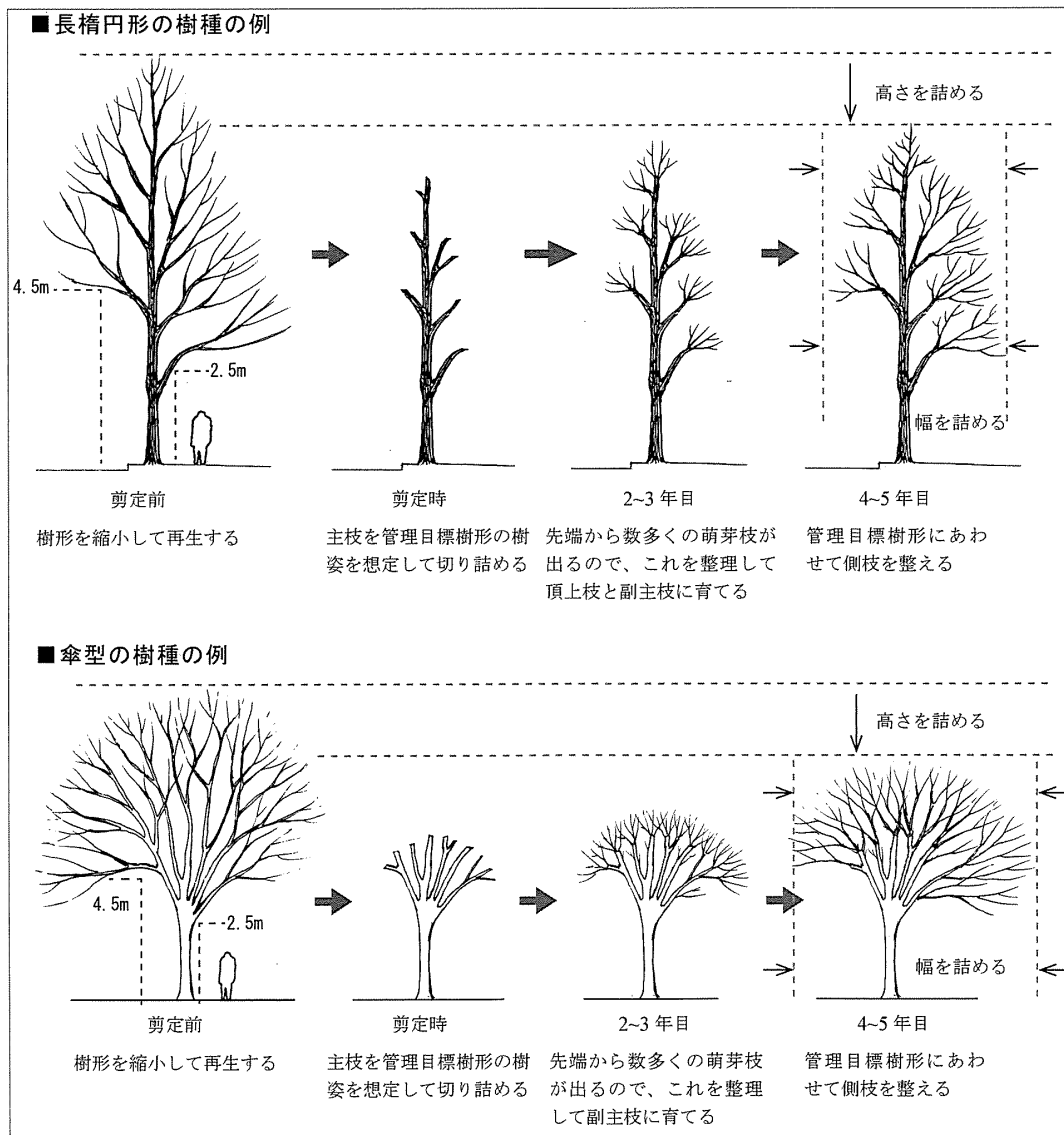
## 6.2 強剪定の考え方

街路樹として利用頻度が高く、かつ生長が早く大樹になりやすいケヤキ、モミジ、バフウ、イチョウ、クスノキなどの街路樹の場合は、年月の経過により、通常の剪定では管理目標樹形を保てなくなってしまうことが少なくない。そのような場合は、新たな樹木に更新するか、極端な樹形縮小のための剪定を行うことになる。その際の切詰剪定の部位は「主枝」から「幹」にまで及ぶことになるため、管理目標樹形に戻るまで多くの時間を要する。

剪定の要点は「切詰剪定」に準ずるが、切り口が広く、そこから腐朽する確率が極めて高いため、実施する場合には、万全の腐朽処置とその後の腐朽の進行の点検を欠かさない。

### ■ 樹形再生の手順

#### ＜主枝まで切り詰める例＞



出典：「街路樹剪定ハンドブックー美しい街路樹づくりに向けてー」  
(平成26年 一般社団法人 日本造園建設業協会)

図 6-1 強い切詰剪定による樹形再生

### 6.3 強剪定を行う場合の留意点

強剪定は、先述のとおり樹勢衰退や樹形の崩れの要因となるほか、幹や枝の腐朽・空洞化、街路樹が有する緑陰形成や景観向上等の緑化機能の低下、景観の悪化につながる可能性も懸念される。

一方で、以下のような場合は強剪定を選択せざるを得ないこともある。

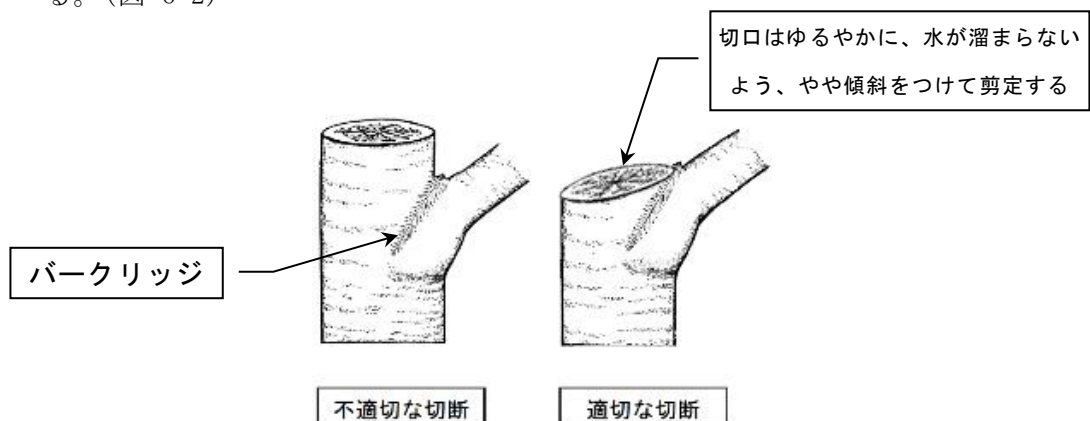
#### 【強剪定を選択せざるを得ない場合の例】

- 建築限界の侵犯や越境、路上施設や占用物件との競合を是正、解消する必要がある場合
- 落葉樹を植栽している道路において、秋季～冬季にかけて集中的に落ち葉が発生し、その清掃等に要する多大な労力を削減する場合
- 剪定時にかかる維持管理費を抑える目的で樹幹を小さく仕立て保つ必要がある場合
- 害虫対策が必要な場合

上記のように強剪定を選択せざるを得ない場合においては、以下のような点に留意することで樹体や周辺環境等への影響を低減することができる。

#### 【強剪定を行う場合の留意点】

- 樹種に応じた剪定適期（樹体への負担が比較的小さい時期）に行う。
- 特に夏に強剪定を行うと樹木は光合成による栄養分を蓄積することができなくなり衰弱し、剪定痕から腐朽が進行することで倒伏や落枝につながる可能性があるため注意が必要である。
- 樹木の生理的特性を軽視した不適切な位置での剪定や粗雑な作業とならないよう、樹木の萌芽力等の特性も考慮した上で丁寧に剪定する。
- やむを得ず太枝や幹を途中で切り落とす場合には、枝や幹の分岐部で切断する。（図 6-2）



出典：「平成26年度街路樹診断マニュアル」（平成26年

東京都建設局公園緑地部）  
※右図は出典を参考に作成

図 6-2 太い枝の剪定や幹の切断

- 剪定後の切り口には、防菌及びゆ合促進処理を施す。

## 6.4 強剪定を行う場合の周知方法

強度の切り詰めや寸胴切りを行った場合、一定の間、樹木の痛々しい姿を呈することとなる。このため、必要に応じて、剪定の目的や樹形再生の道筋について住民等へ周知し、理解と協力を得ることも重要である。

### 6.4.1 周知の対象者

沿道住民、近隣住民、道路利用者や並木保存会等愛護団体など地域の状況に応じて判断する。

### 6.4.2 周知方法の例

剪定の内容や規模、景観への影響等を考慮し、周知方法を判断する。具体的な方法として以下の例がある。

- 立て看板（歩行者用、通行車両用）（図 6-3、図 6-4、図 6-5参照）
- 地元回覧・毎戸配布
- 対象樹木に説明紙面を貼付（図 6-6参照）
- 市町村広報誌、ホームページ など（図 6-7参照）

### 6.4.3 周知内容の例

維持管理上の必要性や具体的な剪定方法等を示す。

- 剪定の理由（問題点として住民要望、環境条件、並木・樹木の状態等）
- 剪定方針（管理目標樹形、管理の考え方等）
- 剪定方法（剪定の年次計画、イメージ図等）





図 6-3 立て看板例（歩行者用：設置状況）

## 「街路樹(ケヤキ)の管理について」のお知らせ

日頃から埼玉県に事業にご理解とご協力をいただいております。特に一般国道463号の沿道にお住まいの皆様には、ケヤキの落ち葉の処理など大変ご迷惑をおかけしております。さて、住民の方々から問い合わせのありました今後のケヤキの管理について、検討した内容を次のとおりお知らせします。

### 現状と問題点

街路樹は、美しい道路の空間を形成するために植栽されている一方、空間的に許される範囲において自然樹形を維持しながら生育させなければなりません。これまで、枝数を少なく枝幅を狭くする「枝抜き剪定」を実施してまいりました。この結果、おおくなくなりすぎた街路樹は、一部高圧線に届くまでになってしまいました。このままの管理方法を続けると樹形が悪くなり、さらに台風等の災害による枝折れ、腐朽菌等による倒木の原因となり事故が懸念されます。

### 今後の管理方針

「安心・安全な道路環境の確保」、「健全で生き生きとした街路樹の生育」を目的とし、樹木医による街路樹診断を行いました。この診断結果に基づき、街路空間の規模、架空線の位置、歩道幅員、ケヤキの樹形から検討したところ、樹高を概ね12mとすることをしました。

また、樹木医による街路樹診断結果により倒木の危険性のある樹木については、伐採します。

### 今後の剪定方法

パランスの良いケヤキに仕立てるため、枝下ろし3～4年後の枝先が概ね樹高12mなるように剪定すると共に今後はこれを維持していきたくて考えております。

1年目：高さ9mで幹や枝を切り揃えます。

2年目：半年後には小枝がびっしり生えるので、これを整理します。

3～4年目：【整姿剪定】により姿を整えます。そして最終形は高さ12mぐらいの美しいケヤキの街路樹に仕立てていきたくて考えております。

### ケヤキの剪定イメージ図

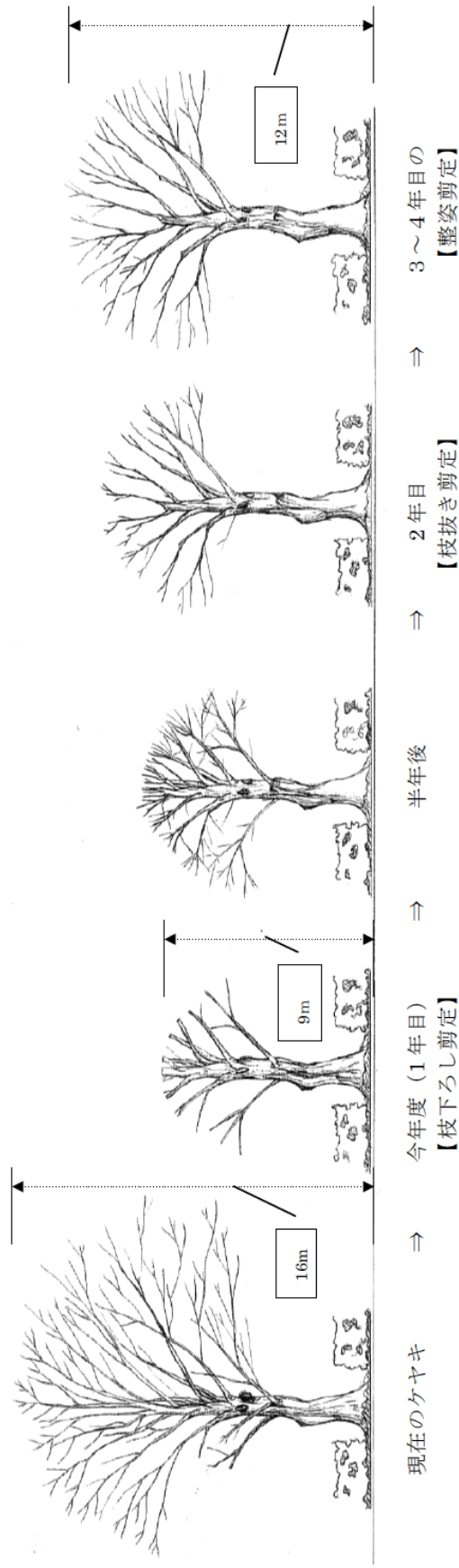


図 6-4 立て看板例 (歩行者用：詳細)

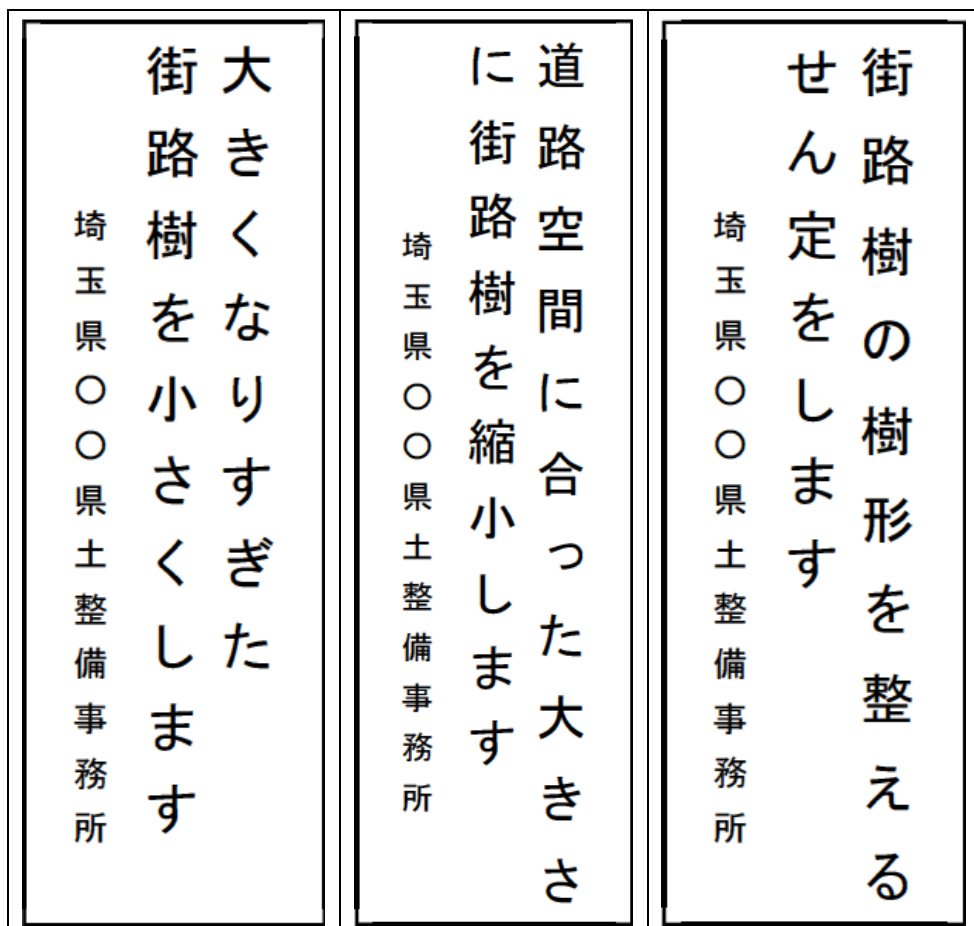


図 6-5 立て看板例（通行車両用）



**お知らせ**

この樹木は維持管理のモデル対象です  
 現在、樹形再生を川口市造園業協会内(公共緑化樹木管理研究会)監修のもと  
 川口市造園業協会でクスの樹形再生に取り組んでおります  
 ご理解とご協力をお願い致します

有限責任中間法人 **川口市造園業協会**  
**公共緑化樹木管理研究会**  
 川口市役所 公園課    **お問合せ**    TEL048(297)1809    平成18年5月～



図 6-6 対象樹木への説明紙面貼付例

# 埼玉

さいたま総局  
〒330-8557  
さいたま市浦和区常盤4-12-13  
☎ 048-832-7311  
fax 048-824-7952

西埼玉支局  
〒350-1123  
川越市監田本町6-20  
☎ 049-248-4800

東埼玉支局  
〒343-0845  
越谷市南越谷4-11-1  
☎ 048-985-3311

北埼玉支局  
〒360-0041  
熊谷市宮町1-1-87  
☎ 048-521-0011

川口 ☎ 048-256-3435  
所沢 ☎ 04-2922-2347  
久喜 ☎ 0480-24-1230  
秩父 ☎ 0494-22-0608

購読・配達のご用は  
☎ 0120-12-0843  
平日 7:00~21:00  
休日 7:00~17:00

広告のご用は  
☎ 048-833-3121

折込みのご用は  
☎ 048-657-1971

きょうの天気  
6-12時 降水確率 12-18時

80	さいたま	30
70	熊谷	20
60	秩父	30
80	越谷	30
80	所沢	30

さいたま 北東 南西 越谷  
熊谷 北東 北 所沢  
秩父 北北東 波 1.0m

湿度 80%

気温	最高	最低
さいたま	24度	20度
熊谷	26度	20度



## クスノキ並木化粧直し

### 川口 造園業者・市が連携

川口市内のクスノキ並木の姿をよみがえらんと、市造園業協会の「公共緑化樹木管理研究」一落とし、新たに芽吹く枝

川口市内でもスギ科の「メタセコイア」の成長で、管理上の課題が出てきたため、昨年からはメタセコイア並木の樹形を整えてきた。

今回は、川口オートリース場から市立青木中学校前を通り、産業道路と交差する市道のクスノキ並木を手がける。

歩道側には142本のクスノキがある。1960年代に植えたとみられる並木は、樹高が約8メートルに達し、枝も道路沿いの木を整えるため、クスノキの枝を切り落とす

集団が幅広く活動している。研究会は、歩道など公共の場にある樹木を管理する造園業者14人で行った。

市内の自治体は高木や枝を張る並木の管理に共通の悩みを抱えている。

川口市内でもスギ科の「メタセコイア」の成長で、管理上の課題が出てきたため、昨年からはメタセコイア並木の樹形を整えてきた。

今回は、川口オートリース場から市立青木中学校前を通り、産業道路と交差する市道のクスノキ並木を手がける。

歩道側には142本のクスノキがある。1960年代に植えたとみられる並木は、樹高が約8メートルに達し、枝も道路沿いの

の家屋に触れるなど防災管理上からも問題点が指摘されている。

5年間のモデル事業として、再生対象にまず26本を選んだ。業者がクレーン車を使って枝を落とす。一度、4メートルの高さまで切断。「丸坊主」に近い状態になるが、数カ月で芽吹いて枝が伸びるといふ。最終的にも翌前後

の樹形を整える。枝を落とした木には、樹形の将来の形を描いたイラストを掲げ、市民に事業への理解を求めている。

同市公園課は、期待の再生ができれば、別のクスノキ並木へ事業範囲を広げたいと考えている。

H18. 6. 18 朝日新聞

図 6-7 市町村記者クラブへの広報活用例

